

日本醫史學雜誌

第15卷 第3号

昭和44年10月30日発行

原 著

- 華岡青洲と門人杉立以成……………蒲原 宏…(1)
- 鷗外の史伝〔洪江抽斎〕の校勘記(Ⅱ)……………松木 明…(9)
- Samuel D. Gross について……………小野 譲…(12)
- 河口信任と隠れキリシタン……………川島 恂二…(25)
- 肖像異変——山懸大弍か香川修徳か——……………故若尾 隣平…(30)
- Abraham Lincoln's Family Doctors…………… E. F. Pearson…(i)
- 例会記事……………(38)
- 雑 報……………(40)

通 卷 第 1377 号

日 本 医 史 学 会

東京都文京区本郷2～1～1
順天堂大学医学部医史学教授室内
振替口座・東京15250番

1日600mgの時代です!

従来のテトラサイクリンに広さと深みが増しました

広範囲抗生物質

Methacycline hydrochloride

ロンドマイシン カプセル

- 呼吸器感染症、消化器感染症などに優れた治療効果が得られる
- 1日600mg2分服で有効、吸収が速かで高血中濃度が長時間持続する
- 胃腸障害が少なく、光線過敏症も報告されていない
- 健保薬価：1カプセル ￥57.00



*科学は世界の向上のために—医学は人間の幸せのために

Pfizer

台糖ファイザー株式会社

東京都中央区日本橋通2の2 TEL (272) 6661

華岡青洲と門人杉立以成

県立ガンセンター新潟病院

蒲原 宏

Seishu Hamauka and His Pupil, Isei Sugitani

Hiroshi Kambara, M. D.

Cancer Center Niigata Hospital, Niigata

まえがき

華岡青洲の春林軒門人録によると、但馬国出石藩^{イセ}仙石美濃守の家中から紀州平山の春林軒塾に遊学したものが六名ある。直接青洲に師事したのは池口純吾、杉立以成、池口中徳、百瀬李庵の四名がある。

杉立以成の子孫は、現在、岩手県盛岡市下橋町四―三一居住の杉立義行博士である。博士の手許に華岡青洲の書簡をはじめとする華岡流外科の資料が所蔵されている。

杉立義行博士は、かつて新潟医科大学整形外科助教授として在任され、筆者学恩の師である。心よくご所蔵の資料を閲覧させていただいたので、その旧出石藩杉立家の系譜と華岡青洲資料の大略をここに報告しておきたい。

杉立家の系譜

旧出石藩々医杉立家は寛政十戊午年（一七九八）十一月に但馬国美含郡茅野村 杉立次郎兵衛同安右衛門が所持していた、「杉立太左衛門遺書写」という寛永十七年（一六四〇）甲申九月十三日付の家譜留書写によると、遠祖は俵藤太秀郷という。戦国の末期、豊臣秀吉の下で江州越川の上家森城主二十四万石の封建領主の下にあったが、大阪夏の陣には豊臣秀頼方についた。

慶長二十年（一六一六）五月八日の大阪落城後、杉立太左衛門は但馬銀山にかくれたが、天和三年（一六一八）にここで玄棟が生れた。寛永三年（一六二六）小出大和守所領の但馬国美含郡茅野村銀山出役となった。

代	名	生 歿 年	法名 その他
初代	杉立 玄棟	元禄十三年(一七〇〇)十一月四日歿	釈洋春居士
二代	杉立 高包	享保十八年(一七三三)四月十日歿	釈松音居士
三代	杉立 高信	明和五年(一七六八)十月八日歿	釈子滴居士
四代	杉立 高昌	天明五年(一七八五)十月二十二日歿	釈正是居士
五代	杉立 重周	文政十年(一八二七)三月八日歿	高照院 釈靖恭
六代	杉立 高賢	文久三年(一八六三)十二月三日歿	直了院 釈青嶺居士
七代	杉立 高潔	明治十二年(一八七九)二月十四日歿	杉立以成、賢
八代	杉立 義郎	昭和八年(一九三三)七月一日歿	杉立竜庵、内蔵太
九代	杉立 義行	明治三十四年(一九〇一)十月二十三日生	初代岩手病院院長 謙徳院 彰山仁義居士
十代	杉立 彰夫		盛岡市下橋町現住 元新潟医科大学助教授 福島医学専門学校整形外科初代教授 大阪大学医学部陳内外科在籍 近畿中央病院外科勤務

しかし幸仙銀山が次第に衰微したので、その出役をやめて帰農した。その後、杉立家の医系初代杉立玄東が元禄十三年(一七〇〇)十一月四日に歿するまでの記録は明瞭でない。

杉立家の菩提寺兵庫県出石町松ヶ枝町貝性寺過去帳によると、医系の初代杉立玄棟から義行の子息彰夫まで十代の医系は次のように連続とつづいていることが知られる。

初代玄棟は寛永十八年(一六四一)に小出大和守吉親の出石城下で医を開業した。以後五代高昌に至るまでは、杉立家に遺蔵されている経絡図などによってみると代々漢方

医家であった。

高昌の時代には、古方派の医師として、出石藩主仙石政辰(五万八千石)の侍医となっていた。

この高昌の頃から、杉立家の家運は、その子杉立以成が華岡青洲の門に遊学することができたことや、また法名に院号を授与されるようになったことから隆盛の方向をたどったことが知られる。

六代の杉立以成に至って、漢蘭折衷の華岡流外科医となつて、杉立家が外科系の医家として変貌することとなる。

杉立以成(一八〇一—一八六三)

本名を以成、字は賢、諱高賢、享和元年（一八〇一）但馬国出石城下に生れる。華岡青洲の門に入ったのは春林軒門人録によると文化十四年（一八一七）三月十九日であるから十六才のときのことである。

このとき青洲は五十八才で、全身麻酔の下で乳癌手術に成功した令名は、すでに全国にとどろきわたっており、その手術に円熟を示してきていた時代である。

杉立以成の入門した文化十四年（一八一七）には全国から三十八名が華岡塾に入門している。

杉立家の口碑によると、足かけ八年間青洲の門下にあり、その俊才ぶりを認められ、青洲の娘「かめ」の養嗣子にと望まれた。すでに婚約者「鏡女」のあることを告げるに及んで青洲もようやく養嗣子とすることをあきらめたという。

青洲の娘「かめ」はのちに奥準平（華岡南洋と改名）を婿に迎えた。

以成は青洲の門下に遊学していたのは文化十四年（一八一七）から文政八年（一八二五）までの八年間ではないかと考えられる。

この間華岡青洲をたずねた頼山陽に接し、また青洲の知友であった紀州和歌山の画家野呂介石およびその門下の蔡徴などと親交を深めた。

頼山陽の書、野呂介石の「溪居秋晚図」をはじめ、介石、蔡徴の書簡、作品が杉立家に現存されている。

この「溪居秋晚図」に以成が文政九年（一八二六）、次の

ような箱書をしている。「野呂九一郎名隆号介石一号四碧齋紀公之臣也、余遊学於南紀華岡氏之門凡八年中關於君府、旅館執事四年、癸未春介石患疫其妻又患打撲皆診余治而愈烏喜而惠此一本、丙戌首夏杉賢識」

これからみると杉立以成の華岡門遊学は八年間であり、その間文政二年（一八一九）八月二日師青洲が紀州藩の小普請医師となつてから、和歌山城下に設けた「出張所」の執事を四年ほど務めていたことが知られる。

野呂介石との出会いは、文政六年（一八二三）で、杉立以成二十二才のときのことであるから、和歌山出張所の執事として、また医師としてすぐれていたことが推測される。

華岡門の執事というのは、春林軒塾経営の事務長格の責に任じられ、塾務を統轄し、同時に後進の指導をしたものであろうと推測されているが、杉立以成の場合は春林軒塾和歌山出張所常勤の医局長に相当するものであろう。

杉立以成は春林軒塾から帰藩後、出石藩における外科の第一人者となつたが、すでに文政十年（一八二七）郷里出石で乳癌の手術を行なっている。以成二十六才のときのことである。

この症例は不幸にも二年後再発して再手術を行なつたが、さらにその後間もなく再発したので以成は師の青洲のもとへその患者を送り、青洲が文政十三年（一八三〇）に手術を行なっている。

このことは、青洲の「乳巖姓名録」に次のように記載さ

れている。

「文政十三年十月二十日但馬城崎湯島村丹波屋善衛門母
(三発) 文政十年八月、門人杉立以成切断。翌十二年十
月発、同医切断。又翌十三年三月、瘡口為反花状、堅硬
如岩、時々疼痛、因来乞治」

愛弟子が手をあげた、翻花状となった乳癌の処置をす
でに七十一才となった青洲が最後の施術を行なったわけであ
る。

その後杉立以成がどれほど乳癌の手術を行なったものか、
明確な資料はないが、天保三年(一八三二)八月十四日江戸
の藩邸在番中に幕府の奥医師曲直瀬養安院の家の娘の乳
腺腫瘍の手術を一例行なってその摘出標本を幕府医学館に
差出した記録が遺されている。(図1)

「曲直瀬養安院極書

仙石道之助内侍医師

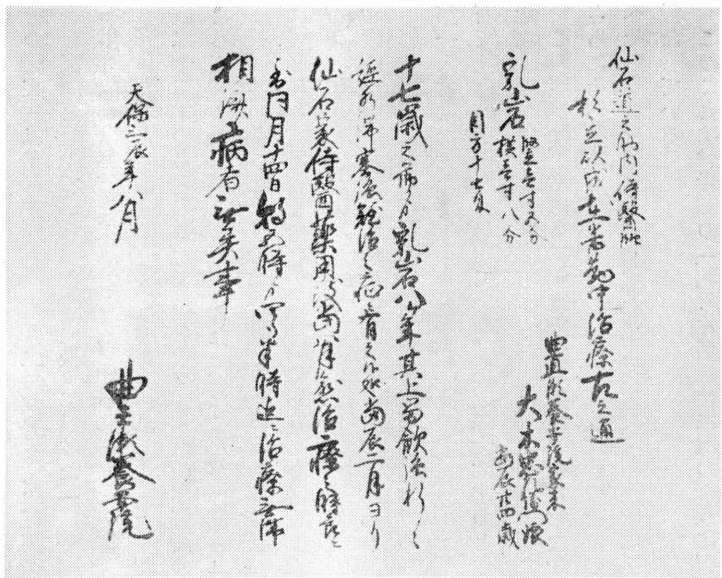
杉立以成在番勤中治療左之通

乳岩 堅壘寸五分 曲直瀬養安院家来

横壘寸八分 大木忠左衛門娘

目方 七匁 当辰廿四歳

十七才之節ヨリ乳岩八ヶ年其上留飲強折々経水滯寒強難
治之症モ有之候処、当辰二月ヨリ仙石家侍医薬用致八月愈
治療之時節ニ至同月十四日夜五時ヨリ四ツ半迄ニ治療無滯
相濟病者無異事



(図1) 杉立以成乳癌手術摘出腫瘍についての曲直瀬養安院の極書

天保三辰年八月 曲直瀬養安院
「八月十八日医学館江差出、来已三、四月之中薬品会江
差出可申事」
この手術症例が病理学的に今日でいう乳癌であったかど

うかは知るよしもないが、手術を受けた大木忠左衛門の娘の名は「於春」といったことが伝えられている。

患者の大木於春の父、大木忠左衛門から杉立以成のことを出石藩にあて

「私娘儀乳岩症相煩候ニ付御当家様御医師杉立以成殿療治被成下、珍療之儀医療之励とも相成候間去月十八日医学館御出席之方々様ニ云々」とあることから江戸における杉立以成の外科手術の評価が高かったことを物語っている。とくに当時医療界に君臨していた漢方の大家である曲直瀬家の家来の家族を治療したことは、巷間の耳目をひくものであったことは想像に難くない。

杉立以成は文久三年（一八六三）十二月三日六十二才をもって歿した。杉立家に万延元年（一八六〇）の寿像が遺されている。（図2）法名を真了院釈青嶼居士という出石町谷山心光院の法域に葬られた。

以成の室、鏡（オミ）は麻見氏の出で、文化四年（一八〇七）生まれ、九十三才の長寿を保ち、明治三十三年（一九〇〇）一月二十日に歿した。法名を慈孝院安室智鏡大姉という。

以成の子内藏太、通称草庵、諱を高潔といい、以成の師華岡青洲の歿した天保六年（一八三五）に生れた。安政四年（一八五七）六月十五日父以成の学んだ華岡春林軒塾に入門し、のち家職をついで外科医として立ったが、明治維新後まもない明治十二年（一八七九）二月十四日四十四才の壮年で歿した。夫人本子（本姓藤原氏）も明治十四年八月



（図2）杉立以生寿像（万延元年）

三十一日に歿している。

その子が明治二十七年東大を卒業し、明治三十一年岩手病院の名院長として令名をはせた杉立義郎である。

華岡青洲の杉立以成あて書簡

杉立家には華岡青洲から杉立以成にあてた書簡が三通現存しているが、いずれも年記が明確でない。

そのうちの第一書簡だけは以成の父は文政十年三月、母は文政十二年九月に歿しているが、「以成の両親がまだ健在で云々」と文中にあり、しかも以成帰国後のものであるところから文政九年（一八二〇）のものとして推定される。

第二の書簡は不明であるが以成帰国後のものかあるいは以成の父重周あてのものであろう。第三の書簡は「出府云々」とあるところから以成が和歌山の春林軒出張所執事の

ときに、平山の青洲から以成あてのものであろうかと思われ。

第一書簡（文政九年と推定されるもの）

華翰辱致拝見候時下秋涼ニ御座候処其御地賣家御揃益御清祥可被成御勤之珍重ニ奉存候隨而野翁義御存之通老年ニ相成候得共今以拙業相勤居候間御安心可被成下候然者貴公茂段々結構之由珍重ニ奉存候、扱筑前之廣田伝亮義此年六月頃致帰国候其節以来大流行九州第一之時医ニ御座候由ニ相聞申候、依之九州之医家者流活物窮理之術弥□□ニ而詣者並奇患之者共尋來致入門候者六七人御座候、右ニ付肥前之国平戸生月村之人ニ而奇患者尋來候ニ付致治療候、是は別紙之図ニ御座候、然ハ此般結構之縮緬壹反部御惠贈御厚志之段千萬辱致頂戴候先は右御札申上度如斯ニ御座候恐惶謹言

九月三日

華岡隨賢

杉立以成様

追仕御申上候御両親様益々御莊建ニ御座候処貴公弥医業盛ニ御座候
嗚々御満悦と致推察候

第二書簡（以成あるいは以成の父重周あてのものかと推定される年月日、宛名欠）

一先年銀翁方江致入門帰国之後少々流行有之候ニ付処々ニ而野翁方治療之事杯致誹謗候人有之風聞承及候是美小人ニ

而非君子徒致経学者左様之事無之者ニ御座候、其人之心中甚可惡ニ御座候、野翁は自幼弱学君子之通至好朱子之説候処世上流行之古文橋学異端虚遠文学は絶而不学候間且亦不好佞候唯好医而已胸中如海大魚小魚相共楽居候間万一誹謗之人有之候時は右之書中趣申聞可被下候、野翁方ニハ日本国中之病人茂宿來又医生多來候処其内不別人者致誹謗能別人者致信伏候、然誹謗人者美小人也然君子也、君子成其美此事申上度候得共長文ニ相成候間不及其義候、唯活物窮理之事相勤候得者無彼是我業相立申候

御同藩之萩野氏者益御莊建御勤被成候、処哉御子息医事御

修業御成就御座候、野生

豚兒共皆々惠物被下候処旦夕是而已憂申事ニ候、萩野氏者野生田朋ニ御座候処其古遊学之節之事共懐出居候、高野山江御參詣有之候節者御入來被下候様御申述奉頼候、彼人は産科之様子承及候香川家之産科術を承及候足下兼々御存之通彼産論ニハ方剂所用之目的相違候事御座候右条之談申度存居候事ニ御座候
産後治療は愚按之手段御座候ニ付如斯ニ候

草々

御序御座候節右条之御咄被成宣敷御伝可被下候繁忙ニ付不能別紙候

第三書簡

杉立以成様 華岡隨賢

以手紙申上候処一日安全可被成候全珍重ニ奉存候、然者野
生義従此節風邪ニ而咳嗽御座候而致難義居候右之様子ニ御
座候得者来六日ニは出府相成不申候此段中村市郎右衛門殿
及有馬氏江右之趣御改可被下候

候 以上

極月三日

その他の青洲関係資料

これらの華岡青洲書簡のほか次のような青洲関係資料が
杉立家に所蔵されている。

一、文政壬午（五年）三月華岡青洲六十三才寿像

「竹屋蕭然鳥雀喧 風光自適臥寒村

唯思起死回生術 何望輕裘肥馬門

右門人杉医請讀予寿像落書与之

于時文政壬午年春三月六十有三翁青洲華震」(図3)



(図3) 文政五年華岡青洲像
(杉立義行氏蔵)

「竹屋蕭然鳥雀喧

風光自適臥寒村

唯思起死回生術

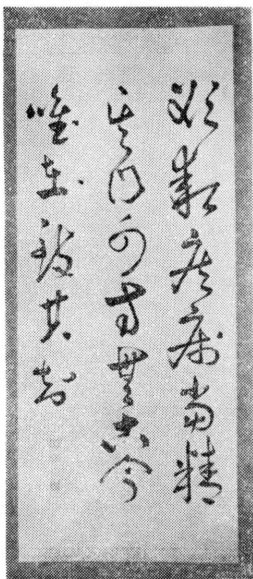
何望輕裘肥馬門

右門人杉医談讀予寿像落書与之

于時文政壬午年春三月六十有三翁青洲華震」

二「欲療疾病当精其内外方無古今唯在致其知」の戒語一

軸 (図4)



(図4) 華岡青洲戒語
(杉立義行氏蔵)

「欲療疾病当精其内外方
無今唯在致其知」

三「君子之交淡如水」の戒語一軸

四「医是在活物窮理」一軸

五「樂先天命後慮物」一軸

むすび

盛岡市在住の杉立義行博士所蔵の華岡流外科関係資料に
ついて調査し、華岡青洲の門人旧出石藩医杉立以成とその
乳癌手術の事績および外科系医系が今日までなお連続とし

て継承されていることを報告した。

青洲門人の子孫が門人録記載の出身地より遠隔地に移ら
れている好例であるが、このようなことから、意外の地に
転住されている場合が多いので華岡外科研究にはなお広範
な地域にわたっての調査が必要であると考えられる。(資
料の閲覧と御教示を賜った杉立義行博士に厚く感謝の意を
捧げらる)

Summary

Isei Sugitani, one of the best pupils of Seishu
Hanaoka, was a famous surgeon in the clan of
Izushi in the former half of the 19th century. Recen-
tly, letters from Seishu Hanaoka to him and some
materials for the surgery of the Hanaoka school were
found out in the posterity's house in Morioka city.

The first surgeon who operated on the cancer of
breast in the clan of Izushi in 1827, was Isei Sugitani,
as reviewed from these materials. And also, it was
pointed out from this study that a large number of
excellent surgeons came forward in the posterity
of Isei Sugitani till quite recently.

鷗外の史伝〔渋江抽斎〕の校勘記 (二)

松 木 明

A Note on Ogai's "Tusai Shibue" (2)

Akira Matsuki, M. D.

2

後の文に辰盛の二男とあるのは、明らかに三男の誤りである。後の二男を三男と訂正すべきである。

3

「辰勝の嫡子重光は家を継いで大田原政増清勝に仕へ、二男勝重は去って肥前の大村家に仕へ、三男辰盛は奥州の津軽家に仕へ、四男勝郷は兵学者となった」(その十一一八頁)。

「辰盛の生年は寛文二年だから年を享くこと七十一歳である。此の人は二男で他家に仕へたのに、其父母は宗家から来て奉養を受けてゐたそうである」(その十一一九頁)。

「為隣は寛保元年正月十一日に家を継いで、二月十三日に通称の玄俊を二世玄瑳と改め、翌寛保二年七月二日に没し、跡には登勢が十二歳の未亡人として遺された。寛保二年に十五歳で此登勢に入贅したのは武蔵国忍の人竹内作左衛門の子で、抽斎の祖父本皓が即ち此である。津軽家は越中守信寧の世になってゐた。宝暦九年に登勢が二十九歳で女千代を生んだ。千代は絶えなるとする渋

江氏の血統を僅に繋ぐべき子で、剩へ聰慧なので、父母はこれを一粒種と称して鐘愛してゐると、十九歳になった安永六年の五月三日に辞世の歌を詠んで死んだ。本皓が五十一歳、登勢が四十七歳の時である。(その十一、一二頁)。

寛保二年に登勢が十二歳で、本皓が十五歳だから、その年の差は三年である。それから三十五年経過した安永六年には登勢が四十七歳で本皓が五十歳でなければならぬ。したがって本皓が五十一歳とあるのは誤りで、これは五十歳と訂正せられるべきである。

4

「独美が厳島から大阪に遷った頃、妾があつて一男二女を生んだ。男は名を善直と云つたが、多病で業を継ぐことが出来なかつたさうである。二女は長を智秀と諡した。寛政二年に没してゐる。次は智瑞と諡した。安政九年に夭折してゐる」(その十五 一三二頁)。

姉妹が二人ともに夭折して姉の智秀は寛政二年に没し、妹の知瑞は安政九年に夭折したとあるが、安政九年という年はない。安政は七年までで、その年の三月十八日に万延と改元になった。しかも姉妹とともに夭折しているのだから、

ら、その年令の差は少なくなければならない。したがってこれは寛政九年の誤りであることがわかる。

5

「柏軒は狩谷掖齋の女俊を娶つた。其長男が磐、次男が今の齒科医信平さんである」(その二十六 一六二頁)

「柏軒の正妻狩谷氏俊の生んだ子は幼くして死した長男業助、十八歳になつて麻疹で亡くなつた長女洲、狩谷掖齋の養孫懐之の養子三右衛門に嫁した次女国の三人だけで、其他の子は皆妾春の腹である。其順序を言えば、長男業助、長女洲、次女国、三女北、次男磐、四女やす、五女こと、三男信平、四男孫助である」(その七十五 一八七頁)。

後の文によれば、磐は次男で信平は三男である。しかもその母はいずれも妾春である。したがってさきの長男は磐で次男は信平でともに俊の子とあるのは、誤りであることがわかる。

また「伊沢蘭軒」の「その二百五十六」及び「その二百八十七」には次のようである。

「わたくしは柏軒が妾佐藤氏春を納れたのが、此年戊

申の事であらうと言った。正妻狩谷氏俊は丙申に來り嫁してより、此に至るまで十三年を経てゐて、其間に長男業助、長女洲、次女国、三女北の一子三女を生んだ。此四人の中能く長育したものは、只国一人のみなるが故に、余の三人の生没は家乘に詳密なる記載を闕いてゐる」(一四一頁)。

「安政二年は蘭軒歿後二十六年である。二月十七日に中橋の家に柏軒の第五女琴が生れた。佐藤氏春の出である。柏軒の女は洲、国、北、安、琴の順序に生れて、北に至るまでは正室狩谷氏俊の出、安より以下が春の出である」(二二五—六頁)。

これによれば三女北もまた正妻俊の子となっている。さきの記事では三女の北は妾春の子となっているが。これは誤謬であらう。「伊沢蘭軒」が「洪江抽齋」の後に執筆されて、蘭軒に於いてその後の資料による正しい知見が得られたものとするれば。この蘭軒の記事をもって正しいものとするべきであらう。

6

「抽齋は天保九年の春を弘前に迎へた。例の宿直日記に正月十三日忌明と書してある。父の衷が果てたのであ

る」(その二十八—一六九頁)。

「直舎伝記抄八冊は今富士川游さんが蔵してゐる。中に題号を闕いたものが三冊交つてゐるが、主に弘前医官の宿直部屋の日記を抄写したものである。上は宝永元年から下は天保八年に至る。」(その五十五—一三九頁)。

後の記事によれば、弘前医官の宿直部屋の日記を抄写した直舎伝記抄は宝永元年から天保八年までとなっているが、前の記事ではこの中に天保九年正月十三日忌明けの項があるので、天保八年とあるのは誤りで、これは天保九年までとすべきであることがわかる。

因に富士川游とあるのは、「日本医学史」の名著で知られる富士川博士のことである。

(未完)

Samuel D. Gross 博士

慶応大学医学部客員教授 小野 讓

On Samuel David Gross

Jo Ono, M. D.

Visiting Professor
Keio University School of Medicine

はじめに

先達って、大鳥蘭三郎教授より Gross について何か話すよう御指令があったが、これは私にとって非常な光栄といたすところである。

Gross は Jefferson 大学では、ちょうど百年私の先輩であるばかりでなく、私は Gross の生まれ故郷に2ヶ年間、学生生活を過ごした遇然の奇縁をもっている者である。そんなこともあって、本日日本医史学会の皆様がたと共に Gross について考える機会が与えられたのではないかと思ふ。

生いたち

Samuel D. Gross 博士 一八〇五年（文化二年）七月八日、

ペンシルベニア州イーストン (Easton) の農家に生れた。

生家の農場は二〇〇エーカー（一エーカー四段余）あり地味肥沃で野菜穀類はもちろん美事な果物の産地として有名であった。この地所の中には馬小屋、倉庫等のほか、ガッチリした石造りの二階家が住居としてあり、そこで Gross は呱呱の声を揚げたのである。現在は Chesterfield farm として他人の手に渡ってはいるが建物の一部は残っている。

彼の父は純真、潔癖、東部ペンシルベニア地方では指折りの紳士として敬愛されていた。彼は背が高く、ハンサム、いつも気品ある態度をもって人に接していた。彼の子息 Samuel も父の特性を受け後年身長六フット二インチ、体重二〇五ポンドの男性美の持主である。（図1 Gross の手術）



図 1. Dr. Gross のクリニック

父は一八一三年十一月、五六才で脳溢血で斃れている。

母の Juliana Gross は結婚前の姓を Brown と呼び一八五三年三月、八六才の高令で喘息を疾って死亡している。彼女は、しとやかで愛くるしく、高邁な見識をもった稀に見る良妻賢母であった。Samuel D. Gross は自己の医師としての成功は、母の膝もとの教育に負うところ極めて大であったと述べている。両親ともドイツ系のいわゆるペンシルベニアグッチであった。

Samuel D. Gross (以下 Gross と称ぶ) の少年時代は楽しい田園生活でボールなげ、兎狩り、魚釣り、蜂の巣あさり等当時としてはありふれたしかし限られた遊びにふけったが、特に鉄輪なげの遊びが後年外科手術の手法と判断力に寄与するところ少くなかったと云っている。

彼は好んで読書に親しみ、聖書、エソップ物語「Benjamin Franklin 伝」、その他歴史物が多かった。

彼がまた六才に達しない時分よりすでに、医師になりたいと両親に話していたと云う。こうした医師へのあこがれが強いインパルスとなって幼年時代から骨の髄までしみこんでいたようだ。

教育過程

彼の少年期の教育は一哩程離れた丸木小屋の学校で、型の如く、読み書きと算術だけであったが、彼の成績はいつも群を抜いていた。彼は勤勉、アンビッシュヤスでドイツ人特有のキメのこまかい綿密さがあった。まず医学の勉強に語学の重要性を痛感し最初に英語の勉強にとりかかった。アメリカ人である彼に英語の勉強とはなぜか。イーストン地方では英語でなく、ペンシルバニアグッチと云ってドイツ語ともつかずオランダ語ともつかない独特の用語を話しているのが少くない。現在でもこのような patois を使っている人があり Gross もその一人であった。

一七才のとき Gross は語学力に相当の進歩が見られたので医学進学の準備ができたと考えた。当時医師になるには開業医について弟子入りし「医学を読みとる」慣習があった。彼もその例にならない、地方の医師数名に転々と奉公したが、どこにも居つくことはできなかった。

その当時のことを Gross は次のように述べている。

「Fyfe の解剖書で骨学を勉強したが私のラテン語の素

養が不十分であることと、医学の理論と實際を理解するにはさらにギリシヤ語を身につける必要があることを痛感した。私は大きな発見をした。それは私が無知であることを知ったことと、これに対応せねばという一大決意をかためたことであつた。」云々。ここで彼は医師の徒弟生活を一旦中止し、Wilkes-Barre Academy に入ることにした。彼は Wilkes-Barre で一ヶ年勉強した後 New Jersey 州プリンストン大学近くの Lawrenceville High School に転じ一応医学進学の準備を整えたのである。

その後約一ヶ年間イーストンの Dr. Swift に弟子入りし一八二六年一〇月フィラデルフィアに出て、直ちに Jefferson Medical College の創立者であり外科教授である Dr. George McClellan の弟子となり数ヶ月後に同大学に入學したのであつた。

Gross は不撓不屈あらゆる困難にも全力を注いでぶつかつて行つた。彼は一八二八年同級生二七名と共に医学部を卒業したが、その卒業論文は「白内障の性格と治療」であつた。

ここで医師として Gross の医学発表論文について眺めてみたい。彼には驚くべき多数の著述がある。彼の著書が歐州人をして、アメリカを高く評価する何よりの基礎をつくれたのであつた。

訳書

Gross は大学卒業後一〇ヶ月以内に四冊の医書を仏、独書より翻訳した。それらは、

フランスの Bayle and Holland's の三〇〇頁ある "General Anatomy" 「一般解剖学」

二冊目はフランスの Hatin's 一六六頁ある Manual of Practical Obstetrics 「産科学の実際」

第三はドイツ語の一八〇頁ある Hildenbrands Treatise on the Nature, Cause, and Treatment of Typhus 「腸チフスの本態、原因及び治療」当時 Typhus fever は "Ship fever" または "Jail fever" と云われ、⁽¹⁾にでも見られた死亡率の高い疾患であつた。この本を Gross が英訳した同じ一八二九年にフランスの Louis が Typhus fever を "Typhoid fever" と新しく称したのである。

第四冊目はフランスの Taveniers "Operative Surgery" 「外科手術」で五〇〇頁ずつの二巻より成る大著である。

以上、四冊の訳出には、Gross は驚くべき努力を傾けている。それは外国語の翻訳に誰でもが共通のむずかしさを経験するほか、彼はペンシルベニアグッチとして生を受けたため、さき程も触れた自国語であるべき英語そのものから教わらねばならなかつたからである。彼にはドイツ語のほかフランス語、ギリシヤ語、仏語、イタリア語をもマスターしたのであつた。

彼は、大学卒業後二ケ年にして、一八三〇年さらに、*The Anatomy, Physiology and Diseases of the Bones and Joints*「骨及び関節の解剖、生理、及び疾患」のモノグラフを出したが、これは翻訳ではなく Gross のオリジナルであつて、絆創膏を骨折や関節の牽引に使用すべきことを初めて提唱したのが彼である。

開業と動物実験

Gross は、フィラデルフィアに住みたかつたが、生計上の都合で卒業後二〜三年にして、彼の郷里であるイーストンに帰り、ここで開業を始めた。しかし彼の向学心と研究心は、衰えるどころか、ますます旺盛で、自宅の庭先に小屋を建て屍体の解剖と動物実験に熱中した。最初の屍体はフィラデルフィアよりイーストンまで五〇マイルを二輪馬車に積みこんで運んだのであつた。

そのころの解剖書はラテン語で書かれていたが Gross はこれを英語版に改訂すべきことを思いつき、その仕事に取りかかり殆んど完成したがこれを出版するにいたらなかつた。

またこの田舎町、イーストンにて忙がしい開業の間に多数の兎と猫を使って、静脈血の温度や腎臓機能特に薬物の排出作用に関する実験を行ったのであつた。

シンシナチ大学教授となる

このような動物実験や、門前市をなす上流患者の診療も、彼の向学心を阻むには至らず、一八三三年、彼は講師とし

てオハヨー大学で後のシンシナチ大学の解剖学教室に席をおくこととなつた。これが彼にとつて最初の教育機関関係であるが、学生の受けが非常によく、二年後には同大学の病理学兼解剖学教授に昇格したのである。彼の将来大をなす基礎と名声はここで築くこととなつたのであつた。

彼は教授としてこの大学に四ヶ年在任したが、その間一八三九年には“*Elements of Pathological Anatomy*”「病理解剖学の原理」を著している。彼の数知れない屍体解剖と屠殺所通いの経験を土台とした本書は五〇〇頁づつの二巻よりなり、この種の著書としてはアメリカはいうまでもなく、英語版としても最初のものであるが、ひき続き三版を重ね、全世界の注目を引いたのであつた。

一八六八年ベルリンにおいて、病理学の始祖と云われる Rudolf Virchow は Gross をアメリカより招いて晚餐会を開いた。その席には、von Langenbeck, von Graefe, Donders, Gurlt その他、医学界の名士綺羅星の如く集つた。そのときの挨拶の結びとして Virchow は、Gross のこの著書を高々と手にささげ、自分としても、この名著より教えられるところ大なるものがあると称讃の言葉を惜しまなかつたと云う。

これよりさき、本書の第二版が発行された一八四五年にはウィーンの Imperial Royal Pathological Society の會員に推されている。

ルイスビル大学教授となる

一八四〇年 Gross はケンタッキー州の Louisville 大学の外科教授に迎えられたが、ここで外科分野におけるすばらしい成功を納めることとなったのである。アメリカ南部及び西部より彼の名声をしたらって集まる無数の患者の診療に当る一方、学生への講義と著述は彼の最も得意とし、楽しみとするところで、在職一六年の毎日人生の華と幸福の連続であった。

医学史に関する著述

かくて彼の外科的名声は全米に広がっていったが、Gross のいま一つのホビーとも云うべき関心事は、医学歴史にあった。彼はまずケンタッキーにおける外科史 (Report on Kentucky Surgery) をはじめ、アメリカ医学の開拓者 Ephraim McDowell 及び Daniel Drake に関するモノグラフを書き、また August Gottlieb Richter; His Work and Contemporaries と同じ同時代の医学者の伝記を著わしてゐる。そのほか "A Sketch of the Life, Character and Services of Ambrose Paré" を出してゐる。また一八六一年には "Lives of Eminent American Physicians and Surgeons of the Nineteenth Century" 「十九世紀におけるアメリカの勝れた内科及び外科医学者」という八〇〇頁に及ぶ編書がある。彼にはまた Jedediah Cobb, Charles Wilkins Short, Valentine Mott, Robley Dunglison, Isaac Hays 等の伝記があり、さらにアメリカ独立

百年を祝う一八七六年には "History of American Medical Literature from 1776 to the Present Time" 「一七七六年より現在までのアメリカ医学文学の史的展望」がある。

動物実験

さて、ここでもう一度一八四〇年の Louisville 時代に触れて見たい。彼のアメリカ南部における活動で特に目につくことは腸の外傷に関する実験である。彼はこの研究で、七〇頭の犬を使いその成果を二五〇頁にあまる報告書 Wounds of the Intestines として出版したが、これはアメリカにおける最初の実験記録となつたのである。Gross は彼の自叙伝に次のようなエピソードを書いている。「私の実験用の犬は大学の同僚に少なからず迷惑をかけている。犬小屋にはノミがわいて、ストーブで暖房した秋の日など、ノミはあちこちにはねまわり親友の医化学教授には特に被害が多かつたようだ。学生の講義にはズボンの上に長靴をはいてノミの攻撃をはねかえさねばならなかつた」こう云つてゐる。

著書

一八五一年 Gross は "A Practical Treatise on the Diseases, Injuries and Malformations of the Urinary Bladder, the Prostate Gland and Urethra" 「膀胱、前立腺及尿道の疾患、外傷、及び奇型に関する実際」を著わしたが、これはアメリカにおける最初の詳しい著述である。

本書の第二版は一八五五年に発行されたが九二五頁の大著で木版画が一八四枚あり本分野の最も権威ある書として有名であった。一八七六年の第三版はGrossの令息Samuel W. Grossによって出されてゐる。

また最も好評を博した書の「*A Practical Treatise on Foreign Bodies in the Air Passages*」 「氣道異物の實際」には五九枚の木版画がある四六八頁のモノグラフでこの種の著書としては世界最初の系統的著作である。ドイツの皇帝フレデリック三世が喉頭癌を疾らわれた際、英国から、はるばる招かれて主治医となつたSir Morrell Mackenzieは、この著書が発行されてから三〇年後に「本書は全く完璧でこれ以上改善される余地は今後もないであらう」と云っている。しかしこの予言的評言は、そ

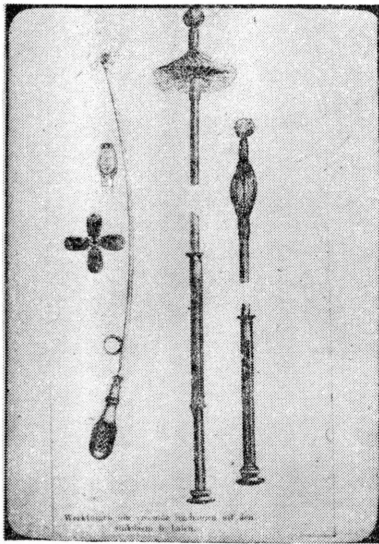


図 2. 氣道食道異物摘出器
グロスの洋傘として知られている

の後Gross自身の弟子であるChevalier Jacksonの出現によつてくつがえされていることは興味あることである。一八五五年、Grossはアメリカ最古の医学校ペンシルベニア大学の教授に招かれたがこれを辞退し、翌年一八五六年(安政三年)彼の母校Jefferson大学の外科教授として迎へられたのである。

驚くべき多数の著書のうちGrossの“*System of Surgery*” 「外科大系」は彼のmagnum opusと云われている。本書は一八五九年に発行されたが、その後版を重ねること六回、最終版は一八八二年に出ている。ここに持参したものは第五版で一八七二年の発行である。この本の序文の一節には次のことが記されてある。「もし学説の、ある点において、同学の最高権威と意見の異なるところがあるとしても、私の考を変えることは絶対にできないであらう。ルートルがWormsの議會(一五二二)におつて、*“Hier stehe ich, ich kann nicht anders.”*と叫んだように、私には誤りも失敗もあるが、ここに記載したことは真理に対する厳粛な確信のもとに述べたものであることを宣言したい。」このように彼の学問に対する自信のほどがうかがわれるのである。

このSystem of Surgeryは全世界にゆきわたり英語版としては最も完璧なものとされている。当時として著者単独でこのように二三六〇頁もの大著を出したことは珍らしく、一八七四年Dublin Journal of Medical Scienceは

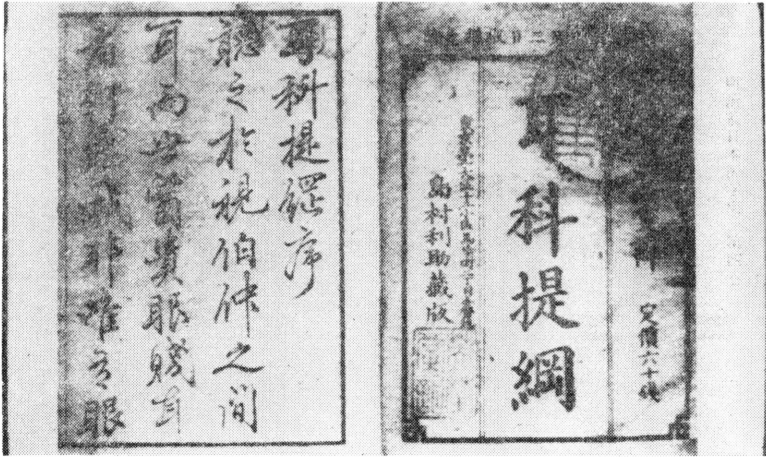


図 3. Gross の原著より和訳された耳科提綱の表紙

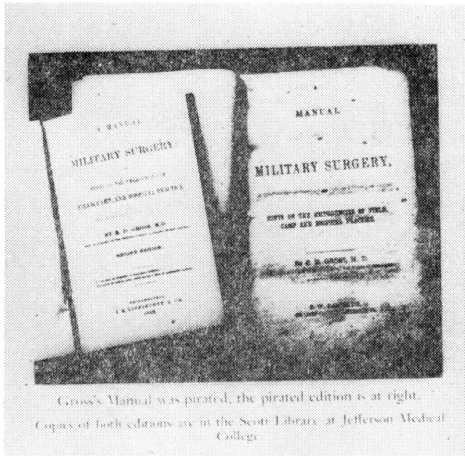


図 4. 日本語にも訳されている Gross の軍陣外科の手引き

五〇頁にわたって書評を掲げ次のように書いている。「彼の著書は世界的である。それは本書によって世界中の外科学が代表されているからだ。その労作は歴史的に公平で僻見なく、しかも勝れて実際的である。外科大系の参考書として最高峯の位置を占めることを信ずるが、このような讃辞を呈すること自体がほとんど虚言のようである。」と。

本書はまたオランダの *Sachse* によって蘭訳され、その中の耳の部分だけを抜いて重訳した「耳科提綱」はわが国での最初の耳鼻科専門書となったのである。また一八七七年（明治一〇年）石黒忠憲は米国外科医「グロス」の書を訳し、

外科通術と題して外科方術の方式を説くとある。(富士川游、日本医学史(昭和十六年四月発行日新書院)(医事年表七二))

Gross は、また、アメリカの南北戦争勃発まもなく一八六一年、「Manual of Military Surgery」[「軍陣外科学」]を僅か九日間で書きあげ二週間でこれを発行し北軍々医に配布されたが、その後、海賊版として南軍でも出版した。犬猿の中である南北両陣営で当時共通の読物となったのは、この軍陣外科学だけだと云われている。

本書はわが国においても一八七四年(明治七年)翻訳出版されている。また、ここに持参した上下二冊よりなる「外科手術」は明治六年田代基徳氏の編集となっているが、その引用書は、外科手術、フランス人ベルナルド氏、外科明要英国人サイム氏、外科新論オランダ人リンハルト氏及び外科全書アメリカ人グロス(愚略周)氏となっている。この書は筆者が Jefferson 大学に寄附したものである。

学会を創設

Gross は医学書の著述や、医学歴史のほか強い関心をもっていたものに学会がある。彼は三つの有力な学会を創設した。それは The Pathological Society of Philadelphia、及び American Surgical Association である。これらの学会はその後発足した他の州または他の国々における学会の模範となったが、それは Gross の英智と知能の記念塔とも云えるであろう。彼はこれらの学会の初代会長となりまた他の多数学会の会長におされアメリカ外科学会の父と

して親しまれている。しかし Gross の関心は外科部門だけにとどまらず最も権威ある Academy of Natural Science「自然科学学士院」や The American Philosophical Society「アメリカ哲学会」の会長にもなっている。

受けた栄誉

Gross には栄誉は多数の大学や学会より贈られているが、なかでも一八七二年には Oxford 大学より D. C. L. を、一八八〇年には Cambridge 大学より LL. D. を、そして一八八四年には Edinburgh 及びペンシルベニア大学より同様の名誉学位が贈られている。Gross の時点で彼より多く授賞されたものはないと云われている。

一八九七年にはアメリカ外科学会と Jefferson 大学の合同の名において、ワシントン市の陸軍医学博物館と国立博物館との庭の中間に Gross の銅像が建てられてある。その銅像の礎石はアメリカ政府の補助によるものである。また、連邦政府議会の図書館の天井には Gross の名がモザイクでできざまれてある。軍人以外の者に政府がこのように功績を認めたことは珍らしい。

滅菌法

Gross はもともと親譲りの潔癖家であった。英国の Joseph Lister の提唱した滅菌法 antiseptis を Gross は彼のクリニックに応用しているがこの滅菌法は彼にとっては日常ルチーンの一步前進に過ぎなかった。Lister の滅菌法の一つは石炭酸を手術室全域に噴霧することであった。

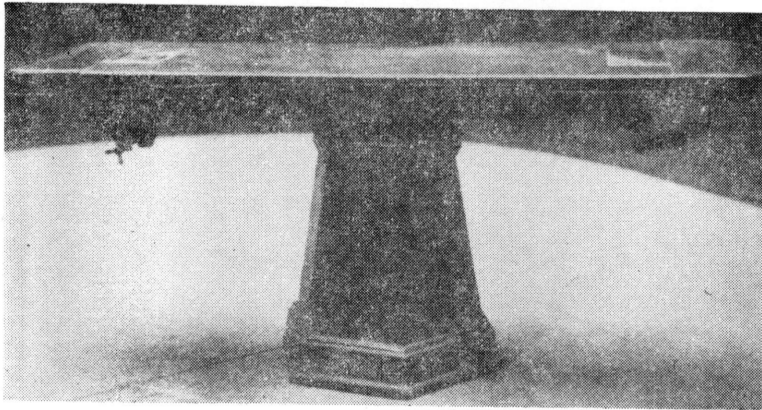


図 5. Gross が使用した手術台

この方法によって、いわゆる laudable pus 良性膿が少く
なったことは確かである。良性膿は細菌感染の産物である。
しかし細菌学が Pasteur によって打ち出され細菌が証明さ
れるまでは、膿 (Eiter) は治癒にいたる一段階と見なされ
ていたのである。不潔や不衛生が膿の原因と信じたのは
Gross はじめ同僚の Allee, Sims, Pancoast 等であった。
手術室で毎日石炭酸の噴霧を浴びた医師の多くは腎炎をお
こし、血尿に悩まされたと云われている。「外科の夜明け」
Das Jahrhundert der Chirurgen とつづ三年前、塩月博
士が和訳した Jurgen Thorwald 著書の口絵にも Gross
の写真が載っており「彼の手術室は思いきった滅菌処置が
採用されて有名だった」と記載されている。

グロスのクリニクを見学した日本人

ところで、外国の歴史には、日本の医師団が Gross の
クリニクを見学したと記録されてある。見学は一八六〇
年であるので、おそらくは日本人として、外国のクリニッ
ク訪問はこれが最初ではないかと察せられる。訪れた日本
人とはいったい誰なのか。

その話の前に日本開国当時の史的背景について少しく触
れてみたい。一八六〇年は万延元年、徳川幕府が日米通商
条約批准のためワシントンに使節を派遣した年である。使
節としては新見豊前守正興が正使、村垣淡路守守範が副使、
また監察として小栗豊後守忠順等一行八一名を擁して当年
二月二六日アメリカに渡ったのである。途中ハワイに寄港

し国王カメハメハ四世に謁見しサンフランシスコに到着したのが三月三〇日と記されてある。ここで一足先に着いていた威臨丸の木村撰津守、勝麟太郎、福沢諭吉等一行とおち合ったが福沢は木村撰津守の従者として威臨丸に同乗していたのであった。

使節一行はサンフランシスコよりパナマにゆき、そのころ運河はまだなかったので、パナマ地峡を汽車で横ぎり、軍艦ロアノーク号 *Roanoke* に乗り、ワシントンに着いたのであった。

たまたま遣米使節一行中に乗組士官として James I Johnston 中尉が同乗し、彼の日記にはいろいろと面白い記事が載っておる。ここではただ一つだけ挙げてみたい。

「五月十五日ワシントンに着く、あらゆる階層の人たちが月世界の使者がくるとも、これほどとは思われない熱狂的歓迎をもって迎えた。いかめしい上院議員、優美な婦人、街にむらがる市民、いずれも日本の使節のことを口にはのぼさぬものとはなく、物見高き群衆は町々辻々にあふれていた。しかるに使節一行は、周囲の罵しる混雑を少しも意に介せざるもの如く、泰然自若とこまえて、かれらを取り巻く興奮せる顔や、落ちつきのない連中をうち眺めていた。あたかも無数の蟻が右往左往して立ち騒ぐのをじっと見つめる蟻塚研究の学者のようであった」とある。他方、村垣淡路守の日記によると使節一行は五月十七日にブカナ

ン大統領 James Buchanan に謁見し、同二十三日には上院を見学したが、そのときの議会の光景は「例のもの引掛け、筒袖にて大声に罵るさま、副統領が一段と高きところにおるようすなど、わが日本橋の魚市のさまによく似たり」と、また同二十五日にはホワイトハウスにおける大統領の晩餐会に招かれ、食後、指洗いの水を飲みて失敗したるものあり」とも記されてある。

さて、一行はワシントン滞在を二十四日間で六月八日帰途についたのである。その途中フィラデルフィアに立ちよったが一行の中には医師が三人おる。宮崎立元（三四才）、山伯元（三二才）と川崎道民（三一才）である。これらの医師団は、外国奉行組頭の成瀬善四郎と通訳立石得十郎等とともに Gross のクリニックを見学しておるのである。その手術は膀胱結石の摘出であったが麻酔担当者は、他ならぬ



図 6. 最初の遣米使節

エーテルの発見者ウィリアム・モルトン William Morton
その人であった。この手術は東洋の人びとをして、目をみ
はらせるものがあったと記されてある。また見学者はエー
テルを手のひらにたらし、鼻でかいだが、その冷たさに
驚いたとある。手術後には外科施設などを閲覧し、また
Jefferson 大学にも招待されておる。

なおそのとき医師団に贈られたもののうち入歯一箱、外
科用のこぎり、銀メダル、外科用器具のほか外科書がある
が、これが一年前 Gross が出版した“System of Surgery”
であったのではないかと推察される。

Gross に関係あるもので、いま一つ歴史的ひとこまがあ
る。それは遺米使節のあと約半世紀を経過した明治三九年、
日露戦争の翌年のことである。当時軍医総監であり慈恵医
大の創立者高木兼寛男爵が渡米され、Jefferson 大学を訪
問されている。そのとき男爵は依頼により学生に講義し、
その中で次のような話をされた。「日本の外科は、このす
ぐれた大学において長年外科教授をされた Gross の教授
法にその基礎をおいている。Gross のドイツ語に訳された
外科大系はわが国民によって、さらに重訳されたが、日本
で現在行われている外科は Gross の外科大系の上に築か
れたものである」と。

おわりに

Gross は Jefferson 大学における二十六年間の外科教授
の職を十八八二年辞し、彼の令息 Dr. Samuel Weissell

Gross と Dr. John H. Brinton がその後継者となった。
引退後は胃カタルと気管支炎に悩まされたが、息を引きと
る二時間前まで著作の校正を続けたという。

一八八四年五月六日死亡し、遺志により屍体剖検後ペン
シルベニア州ワシントンにおいて火葬に附されたが、火葬
はアメリカでは現在でも極めて稀にのみ行われる慣習であ
る。なお遺骨はフィラデルフィア市の Woodland Ceme-
tery に安置されてある。

以上 Samuel D. Gross とこの人物の一端について御話
申しあげたが、これを要するに Gross は彼の時代におけ
る最も勝れた外科医の一人であったばかりでなく、彼につ
づく後輩に大きな影響力をもった指導者でもあったと思
うものである。

彼の影響力はどこにあったか。彼の勤勉、実直、不屈不
撓の精神、仕事に対する燃える情熱と行動力にあった。一
八七九年彼のために催された感謝の会で Gross は Man
should wear out, not rust out 「人は身体と頭とを使い果
たすべきである。錆び果たすべきではない。」
と云ったがこれが Gross の全生涯を象徴しているかと考
えるものである。

御清聴ありがたく感謝したい。

本稿の内容は日本医史学会の昭和四十四年一月例会で報告した。

引用文献

- Bauer, Edward L.: *Doctors Made in America*, J. B. Lippincott Co. Philadelphia, 1963.
- Fabricant, Noah D.: *Why We Became Doctors*, Grune & Stratton, New York, 1954.
- Garrison, Fielding H., In *Introduction to the History of Medicine*, Fourth Edition, W. B. Saunders Co. Philadelphia, 1960.
- Gibbon, John H.; Samuel D. Gross, *Annals of Medical History*, Vol. 8, No. 2.
- Gross, Samuel D.: *System of Surgery*, Henry C. Lea, Philadelphia, 1872.
- Keen, W. W.: Samuel David Gross, *The Lesson of His Life and Labors; A Eulogy Pronounced at the Eighty-fifth Annual Commencement of the Jefferson Medical College of Philadelphia*, June 6, 1910.
- Rohrer, C. W. G.: Professor Samuel D. Gross: America's Foremost Surgeon, *Johns Hopkins Hospital Bulletin*, Vol. 23, March 1912.
- Skillman, David Bishop: *The Biography of a College*, Lafayette College, 1932.
- The America-Japan Society, Tokyo, *The First Japanese Embassy*, 1920.

Summary

To delve into the lives of great figures in medicine is always inspiring and rewarding for those who follow in the footsteps of their profession. Samuel David Gross, who was Professor of Jefferson Medical College of Philadelphia, is such a figure.

Gross rose from a humble origin to America's foremost surgeon. Having been born in 1805 and reared as a Pennsylvania Dutch, young Gross was hardly able to speak proper English. However by his dint of indefatigable spirit and firm determination he mastered Greek, Latin, French, German and Italian as well as his native English. With these potent linguistic tools Gross became a prolific writer. Among almost countless books which he published, the 2360 page "System of Surgery" is considered his magnum opus.

An interesting feature of this article is the account of three Japanese physicians who made a call at Gross Clinic in 1860. This, perhaps, was the first such visit made by any Japanese to a clinic of a foreign country. Watching the Gross operation on the bladder-stone of a patient with anaesthetization carried out by no less personage than Dr. William Morton, the discoverer of ether, undoubtedly was more than an eye opener

for the visiting Japanese.

The author of this article depicts the breadth of interest of this remarkable man as a skillful clinician, admired teacher, devoted researcher, great organizer and excellent historian who exemplified himself to be true to his motto, "Man should wear out, not rust out."

河口信任と隠れキリシタン

古河市 川 島 恂 二

Shinnin Kawaguchi, an Anatomist in the 18th Century, Especially on the

Problem of His Being a Hiding Christian

Junji Kawashima

河口信任は本邦第二番目の解剖書「解屍編」を刊行した阿蘭陀外科医である。

信任の家は、祖父良閑以来、利勝直系の土井藩御側医勤めであつた。信任の産れた時の土井藩は肥前唐津に居城してゐたので、従つて信任は九州人として元文元年唐津の武家屋敷に生れて育ち、山脇東洋の無二の親友原双桂が藩学盈科堂校長の時に学び、儒医双桂から非朱子学の講義を受け、古医方の実証精神を教わつた。時に唐津藩と島原藩は一年交代で長崎の事を管して巡見する事になつてゐたので、双桂はしばしば藩公に随行して長崎に赴いた。

だから、山脇東洋のヘスリング解剖洋書入手は、原双桂が長崎に得て唐津から密送したと考えるのが妥当と思われる。

処で、昨年昭和四十三年に、私は、長崎巡見に土井侯に

随行した重臣の一人山本角右エ門方から、今日迄嚴重に他見を禁じてゐた備前長船の一刀を得たが、理由は南蛮キリスト鏢仕込みの隠れキリシタン刀であつた。

私は、其他、土井藩家臣が明治維新後の武士の窮状から売喰いに出したキリスト鏢（東京国立博物館佐藤寒山氏鑑定済。内壱方は見事な南蛮長崎キリスト鏢）三枚を入手してゐる。

斯様に、唐津土井藩は、キリスト取締り役であつたにも拘わらず、自藩に隠れキリストの輩を内蔵したのは、長崎から實際の外国（阿蘭陀）の姿を直々に見、一方に、鎖国の自分達の姿を経験し、この両つの体験から、封建的風習の各種各様に反駁を試みた形の一つであつたものと思ふ。

だから特別にオランダのキリスト新教を信じた訳でもなく、進歩的思想の象徴位の意味で、即ち「外国文明取入れ申し候」位の意味の隠れキリシタンではなかつたかと思ふ。

何れにせよ斯様な空気を含んでゐた唐津藩であつたから、実際に、無意味な耶蘇取締りをしてゐないし、盈科堂では幕府の正統儒学たる朱子学（山崎闇齋系の稲葉迂齋）も、禁ぜられてゐた筈の非朱子学（伊藤東涯系の原双桂）も併講させて居り、而も唐津土井藩の最後の藩公土井利里（としさと）公は、この非朱子学の儒医原双桂を式代校長に任じ、藩公の御抱刀工には肥前守源朝臣本行（豊後高田一派）を用い、本行は宝歴十二年利里公に随ひ下総古河に住むが、実はこの三代目本行は隠れキリシタンであつた。

この利里公は明和六年冬古河城主のまま、京都所司代となり、明和七年春には、古来の仏教思想の禁ずる死体損傷の解剖を、山脇東洋の解剖の非難最中の世論の中に敢然と許したり、その思想と行動は極めて自由闊達宏大である。これらの進歩的行爲は、長崎巡見によつて直接オランダの姿に觸れて、広く世界を眺めてゐたからこそ成し得たと思われる。

この利里公が唐津城主であつた時に、河口信任は宝歴九年から宝歴十三年迄長崎遊学して栗崎道意に入門して南蛮と紅毛の医術の免許皆伝を受けたり、通詞の加福氏と親交を持つたりしてゐたのであるから、信任の頭は余程に進歩思想であつたに違ひない。

信任の長崎遊学時代には蘭館医の婆膚縷（Bauer）に就いて外科を修熟して蘭書反訳の出来る吉雄耕牛が住んでゐた頃で、科学する者ならば誰しも血湧き肉躍るの感で長崎

を目指して蘭学に飛び込んで行つた日本の前ルネサンス時代であつた。この良き時代に長崎で勉学の青春時代を送り、進歩思想の原双桂校長に教わり、理解度の広い明君土井利里公を主君に頂けた河口信任は、正に天下の幸運児であつた。

此等の運の良い多数の因子の組合わせの結果、河口信任は人体解剖をする事が出来たのであるが、一方、信任の解剖時の姿からは、常に「解き得ぬ謎の姿」が付き纏ふ。

即ち「解屍編」と「蔵府凶志」の記述に因ると、京西に賜つた屍体は首一級、首無屍二体で、而も首を刎ねた附け根の皮膚と肉は、千切れてぼろ布れの様なので、宛然の屠者が、うろたえて、屍体を切れないでゐる。と、信任は屠者から刀を奪つて、次から次と、手際良く解剖を進めて行つた点である。

この記載を見ると、信任の勇氣は、単に科学的精神の旺盛のみからではなく、ぞつとするような凄い深味のある勇氣である。

それで、恐らく、その前に人体解剖をしてゐた経験があるのではないかと疑ひ度くなる。而もこの解剖に使用した解剖刀は現在でも河口家に二刀残つてゐるが、昭和廿九年秋、古河での石原明氏の観察でも、態々解剖用に作らせた二刀である。と、すると、屠者にやらせないで、初めから自分で解剖をする積りで用意をしてゐた事が判る。

ではその前の経験は何時であつたか？、斯様なふしはあ

るのか?、と云ふと、ある。

それは幸運にも河口文書の中に、河口信任が唐津から古河に来て四年目の明和四年三月に、園田又右工門をして厳重な秘密を守る誓約書と自署血判(今日も判っきり肉眼出来る血判)の上入門させ、栗崎金瘡外科と阿蘭陀外科を教授した誓詞が見つかった。

京都に赴いて「解屍編」を刊行后再び古河に帰城してからは、安永八年四月に阿知波祐碩こと尚兄と、小山伝蔵こと信成を、更に、寛政八年三月に吉武十助こと忠久を夫々、園田又右工門と同じく厳格莊嚴な自書自筆血判の誓詞を提出させた上で栗崎金瘡外科と阿蘭陀流外科奥義を伝授してゐる。

更に昨年(一九六八)は、信任の孫の信順(杉田玄白門人)が、自庭内西側の篠笹繁る中の水塚(みづつか)を堀ったら多数の白骨が出たので、此等の白骨を土井公菩提寺の正定寺に収め、永代供養料と共に、時の十三世順誉上人と誓約文書を交わして、解剖供養塔たる万霊塔を文政十年三月建立してある記録が判り、その万霊塔も見つかった。

これ等の事から考えると、信任は既に自庭内の篠竹繁る個所で、秘かに門人と人体解剖をして教えてゐたと考えられる。

屍体入手経路を考えると、信任邸の近くの大手門の路一つ距てた処に武士の処刑場があるし、又、信任邸の南側は渡良瀬川と直結する沼なので、何処からか舟で運んで来る

事も考えられる。

何れにせよ、明和七年四月廿五日京西で刊屍を解剖したのは、信任に取っては、人体解剖の初回ではない事が判明した。

従って、信任が既に解剖刀を作らせて持っていた点や、京都での見事な勇ましい解剖振りが判った。

処が、それでも尚ほ、信任の人体解剖の勇氣の出処には何となく疑問が残る。

それは、唐津から古河に移って後、何故に隠れて門人と人体解剖をしてゐたのか?、その勇氣は、長崎で本邦前ルネサンス的空氣を一杯に呑んで来たからか?。それだけではない筈だ。

尠くも大宝律令以来仏教國是の禁ずる屍体損傷を却けて、敢然と人体解剖を実行した山脇東洋と之を許した所司代酒井忠用公の勇氣の出所は、私には未だ本当には判らぬが、只管らに頭を下げて尊敬するのみである。

河口信任の場合も、実証科学精神が最高に働いた事は判るが、当時の神仏の崇りを恐れる本邦古来の習俗に反抗出来た信念とも云ふべき、心の支えとなった信仰の様なものはないだろうか?。

私は以前、河口信任の文書調査の折、信任関係書類の箱から、十字の入った南蛮小布れと、つまみに十字の入った

蓋の瀬戸物の壺があったのを何気なく覚えてゐたが、長崎巡見隨行の土井藩家臣方からキリスト鐔が散見されるので、若しや河口信任は隠れキリシタンではないかと疑つて見た。

オランダ式の新教のキリストならば、旧カソリック系の朱子学に類する教義に対するに、マルチン・ルッター式非朱子学、古医方に類する教義であるから、科学的実証精神に於て共通するし、ヨーロッパのルネサンスを経験した新教は、人体解剖を敢行して科学する宗派であつて、日本古来の伝承無批判承認式の仏教の教義を超えるものと、当時の河口信任は考へて、蘭学憧れから遂に蘭人の信仰するキリスト教に心を馮かれて、やがて、屍体損傷嚴禁の仏教に反駁して、解剖敢行の氣持になつて、茲に、そもその心の勇氣の拠り所を得たのではないかと推測を樹てて見た。

すると亦幸運な事に、現河口家には、「跡を継ぐ長男以外には絶対に他見を許さない」ものが、長持ちに保存されてゐる事を、秘かに同家で知つた。ので、明治百年になるのに今日末だにそうした掟を嚴守しなくてもよいではないか、万一、人骨でも出て来たとしても私は医師につき他言無用で不吉なものは処分する事を約して、やつと三百年から守つて来た同家の仕来りを破つて、感激の胸をふるわせ乍ら何が出て来るかと、見守つた。同家の現祖母も嫁に来てから中味を見た事なく、当主もその嫁も見た事はなく、全く、今回初めて見る訳である。

すると第一の包みは、信任の唐津から古河道中の路銀と、道中薬と、嚴重に包んだ三枚の鐔と、石造硯り水差しであつた。

この水差しは支那服童子が両手を真横に拡げて、四角の水溜めを覗き込んだ姿だが、実は、キリストの磔りつけ十字姿を現わしていると思われる。

又、三枚の鐔は皆キリスト十字鐔であつた。

一枚は無銘江戸初期作の誰が見ても文句なしの十字鐔である。二枚目は安行銘、大小二つ小穴あきのマリア鐔である。小穴は、大はマリア像を小は子供を表わし、安行は江戸初期末から中期にかけての薩摩橋口勘之丞安行で、信任が長崎遊学中に長崎で入手したものらしい。三枚目は四方猪目透（しほういのめすかし）のキリスト十字鐔で、唐津住刀作人、河内守本行作と銘があるので、土井利里御抱刀工の三代日本行で、実は、隠れキリシタンの徒であつて、信任が唐津住の時の入手であると思ふ。三枚とも年代的にも信任唐津時代蒐集品に間違いない。

第二の包みは、土井利位（としつら）公より拝受御墨附の赤銅の二枚組み鐔を始め、有徹（江戸末期、明珍家下総古河住）の珠数つなぎ文様二ヶ彫りの鐔等多数に混つて、嚴重に別に包まれた五枚の鐔が入つていた。この包みには刀手入れ道具もあつて、その道具の丁字油の瓶は大正時代のものにつき、この第二の包みは、信任以後の子孫の分である。そして、特別に嚴重包蔵の五枚の鐔は全部キリスト十

字鏝で全部無銘であるが、中の一枚は作柄より判じて三代目本行らしい。

信任の子の信宜は又信旦、公誓と号したが、切利信旦キリシタンかも知れない。

其他の包みは未だ未だあるが、今回は、未だこの二包みさきり見せて貰えない。あとの包みから信任の解剖のオランダ原書が出るとよいと思う。

斯様な訳で、遂に、信任が隠れ切支丹徒であつたと考えてよい物的証拠が見つかった。

更に、信任は死去二年前に、古河藩武士の墓所の一つ、永平寺末寺(禪宗)の鮭延寺(熊沢蕃山の墓あり。蕃山の師、中江藤樹は隠れキリシタン。)に土地等寄進して墓所を約してゐたのに、何の理由か?、死の前年に、現在の本成寺(日蓮宗。不施不受派ではない。)に土地畑地等多額寄進の上、現河口家墓所とした。唐津時代は法蓮寺(昔、不施不受派?)であつた。

この事から、信任は、信仰教義の上から色々に迷ひ、古来の仏教概念に余り摺り合はれない創造的反骨思想の匂ひのある宗派の本成寺に決めたのではないかと考ふる。

結 論

一、河口信任が隠れキリシタンであつたと思われる物的証拠を色々発見し得た。信任のキリスト教は、天草四郎等に見るポルトガル・スペイン系の旧カソリック系ではなく、

オランダ新教のものと思ふ。

一、河口信任が、人体解剖を許されて行なつた以前から、既に行なつていた勇氣の出所は、本邦前ルネサンスの空氣を長崎に吸つた事もさる事乍ら、更に、オランダから受けた新教キリストの科学的精神も一部に拠り処となつたと考ふる。
(一九六九・四・二五)

Summary

The author found in remains of Shinnin Kawaguchi some articles (for instance, a pot, a piece of clothes and sword-guards), which possibly prove that he had faith in Christianity secretly.

His courage to dissect a human body ensued, not from the spirit of Buddhism, but probably, from his hidden faith in Christianity.

(附) 医史学会例会の席上で、緒方富雄、津崎孝道、鈴木正夫、石原明の諸先生から、河口信任時代のオランダからのキリスト教は、私の考へた程のプロテスタントの要素は殆んどなくて、依然昔のカソリックのキリスト教と考ふる可きとの御教示を頂いた。茲に諸先生方に感謝申し上げます。

肖像異変

——山県大弐か香川修徳か——

甲府市 故 若 尾 隣 平

A Portrait in Question Is it Yamagata Daini or Kagawa Shutoku?

the late Rinpei Wakao

紹介のことば

古守 豊甫

昭和四二年夏のこと、私は若尾博士と懇談中、談たまたま藤井尚久教授のご他界にふれるや、同博士は憮然として旧友の死を痛惜されたのであった。ここで私は藤井教授が、その名著、「明治前日本医学史巻三」の中の香川修徳像が山県大弐像と同一のものであることについて、生前深く心痛されていた旨を語った。すると若尾博士は、「藤井君を弔う意味でも、これを研究しよう」と洩らされた。以来一年の歳月が流れて脱稿されたものが、すなわち本論著である。この間における若尾氏の研究態度は、まるで何物かにつかれたかのような熱心さで資料を集められた。私は時々訪れ

てはその経過を拝聴し、又ある時は二人で山県神社を訪問したこともある。昨年六月、私は日本医事新報に、「東京医大名譽教授藤井尚久先生を憶う——香川修徳と山県大弐像をめぐって——」と題して拙稿を発表したが、若尾博士にも、一日も早く発表されるよう願っていた。たまたま昨秋突然病臥の身となられ、今春正月八日、ついに黄泉の客となられた。誠に痛惜の情に堪えない。私は恩師藤井教授に対する若尾博士のうるわしい友情と、その学問的態度に感激し、かつは両先生のご冥福を祈りつつ、本論文を紹介し上げるものである。なおこのことに関し、小川鼎三教授のご高配に対して、心から深謝申上げる次第である。

この度、明治前日本医学史第三巻の口絵肖像について古守博士の発見指摘は、重大な問題を含んでいる。

さっそく、著者であり、恩師である藤井教授に問合せたのは、無理からぬことである。

学問に篤実な君は、亡くなられた恩師を追慕すると共に、この問題をこの際ぜひ解決して恩師の徳に報いたいと願っている。

藤井君と私は八高三部時代の同級生であり、五十音順の関係で、教室では最前列に机を並べていた。大学が違ってからすっかり疎遠になっていたが、君は東大卒業後、東京医大の教授として生涯教壇の人として活躍され、また多くの著書に依って医学に貢献されたことを陰ながら尊敬し、また喜んでいた。

突然に、昨年の夏、古守君から、君の訃をきいて驚いた。平生親しくしている古守君の恩師が、その藤井教授であったことは今まで知らなかった。

あの白哲長身で温順聰明の好青年の藤井君の姿しか知らないで、自身の老は忘れて、つい瞬間の錯覚が働いてしまふ。君の印象として、今もはっきり残っていることであるが、物を言う時に抑揚が強く、特に、接続詞「そして」という場合、「ソヲ、シテ」と一音一音押えつけて発音した。それが君の落付いた緻密な性格を表わしていたようだ。今、絶筆に近い君の古守君宛の書翰を拝見すると、生ま生まとあの「ソヲ、シテ」が聞えるようになつかしいと、

同時にどこまでも良心的な、謙虚な心情に打たれて、痛々しくさえ思われる。同時にまた、私は直覚的に、これは君が起した問題ではないと予感した。

調べて見ると、果してその通りであった。

○ 日本学士院編纂の、「明治前日本医学史」第三巻、藤井



写真(一)「医家先哲肖像集」

尚久著の口絵、香川修徳像は、前記、藤井書翰にある如く藤浪剛一先生著、「医家先哲肖像集」、昭和十一年、刀江書院刊行に拠ったことは確かである。(写真一)

この藤浪家所蔵の修徳肖像は、同じ昭和十一年刊行、平凡社の「日本大人名辞典」に、周辺は切り縮められ、従って作画者の落款は除かれたものが藤浪剛一氏蔵として、掲げてある(写真四)



写真(二)

「大人名辞典」のこの頃の執筆者は、九州大学の小川政修先生で、かって私どもの恩師であり、細菌学の教授であった。

恐らく、あの肖像画を香川修徳のものとするのは既定の事実であったのであろう。もし、異説が起るとしても、それは藤井氏以前の問題である。

○ 試みにこの肖像画を香川修徳として吾が郷土山梨県に持ち来って一般に供覧したと仮定すれば、県民の大部分が、古守博士と同じ驚きを喫することは相違ない。

わが県では、昭和の初期以来終戦まで、小学校へ通った子供は、学校の玄関に、郷土の英雄武田信玄と並んで、一代の碩学、勤王の魁として、山県大貳の肖像が高く掲げられているのを毎日見ていたであらう。

たしか、当時、文部省は、国定教科書のいづれかにその肖像画を載せた筈である。

明治以後、山県大貳に関する書籍は、汗牛充棟といって差支ないが、その肖像については、私如き寡聞な者でも次の様に見ている。

。最も古いとおぼしきものは、明治四十三年、顕光閣刊、

「山県大貳」、町田柳塘著。

これは「賜天覽」の大型印章で巻頭を飾っている名著で、口絵に、山県大貳肖像、甲斐国市川村松与左衛門氏所蔵という、所持銘がある。肖像の上部には明治卅六年冬日、題贈正四位山県大貳君肖像として、男爵富岡敬明（西南役偉勳者、号耿介、本県住）の五言古詩が物さされてある。村松与左衛門氏は吾が郷土の史学家村松志孝氏である（写真一）

そしてこの像は、藤浪氏の「医家先哲肖像集」より実



写真(三)「山縣大貳」

に二十八年前の発表である。

次いで、昭和に現れた山県大式像は次の通りである。

。昭和九年、平凡社刊、「大百科事典」(執筆者樹下氏)、挿画。

。昭和十五年「勤王の先駆、山県大式」、村松志孝著。口絵。

。昭和十八年、竜吟社刊、「日本儒医研究」、安西安周著。口絵。

。昭和十八年、三井出版商会刊、「山県大式正伝」、飯塚重威著。口絵。

。昭和四十二年、山県神社奉賛会刊、「山県大式先生を偲ぶ」、河野幸彦編。口絵。

以上は私の管見であるが他にもあろう。これらの書の口絵または挿画の悉くが、ここに問題となる香川修徳像と瓜



写真(四)「日本大人名辞典」

二つである。

著書の他に、吾が県の山県神社々務所には浮彫の大額が掲げてあり、その風姿客貌も右と全く同一である。その他に、古守氏の掲げた様に、新聞や雑誌に現れたものも数多いことであろう。

なお、大式の肖像については、別種のものが二、三蔵されているらしく、最近のパンフレット「山県大式先生を偲ぶ(前出)に拠れば、「村松氏所蔵のものは、同氏が市川大門町広瀬保庵家(村松氏外戚祖)所蔵のものを、当時、甲府在住の画家、村岡応東氏に模写させた日本画、紋は桔梗、全勝寺(四谷舟町)所蔵のものは山梨師範学校教諭矢崎好幸氏が揮毫した油絵で、山県昌一氏奉納のもの、紋は同家使用の三ツ葛紋」とある。然し私は右、広瀬家所蔵のものも、全勝寺所蔵のものも不幸にしてまだ見ない。その他、私の見たもので土屋節堂著、「趣味の甲斐史」の挿絵は粗画であるが、この問題となっているものと風貌が全く違っている。

そこで、比処では結局、村松氏の大式肖像と藤浪氏の修徳肖像とを比較するだけにとどめるが、ただ、後者の修徳像には右下部に作画者の落款、「鎌山謹写印譜」があるが、前者の大式像には、周辺が除かれ、従ってそれが見えない。また、仔細に見ると、修徳の方は画法が古い日本画式であるが、大式の方は幾分後世風の手法である。

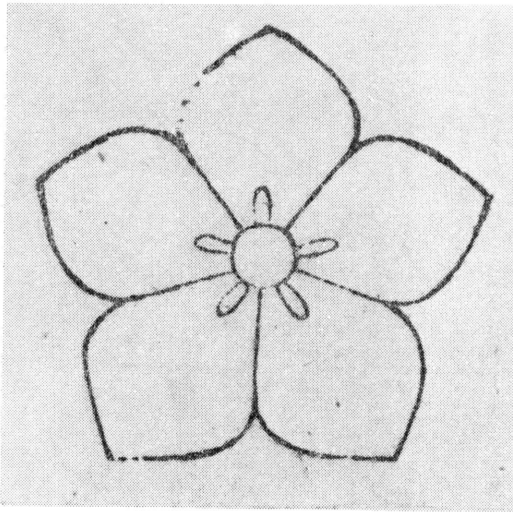
次に一つ最も目立つ両画の人物の容貌の差異は、頭髮の

筆致である。私の感じから云えば、修徳は白髪、大式は黒髪を思わせる。このことは修徳（七十四才死）と大式（四十三才死）の年令にそれぞれ相当している。

以上三つの差異は両像の由来を考えるに有力な参考になるが、この広瀬家所蔵の原画と、藤浪家所蔵の修徳像とは大略同一物と推定される。

○

そう考えて置いて、さてこの人物が果して大式であるか、修徳であるかを決定するのであるが、この鑑定に大切な目標となるものは、羽織の紋章である。



(写真五) 「見聞諸家紋」

ここに見るような偏桔梗は、日本紋章学、見聞諸家紋等に拠れば、源頼光に創まるといふ、即ち美濃の土岐一揆の所謂土岐桔梗である(写真(五))。

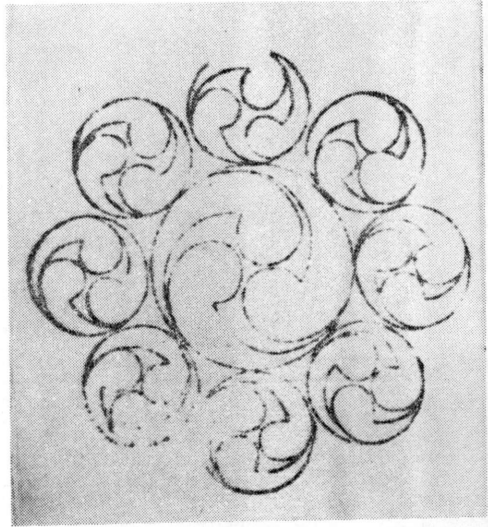
姓氏家系大辞典・甲陽軍鑑・甲斐国志に明かであるが、武田二十四将の一人、山県三郎兵衛昌景は、美濃国山県郡の出で、大式の継いだ家系の先祖である。「軍鑑」、品第十七に、「山県三郎兵衛、旗、黒地に白桔梗」とある。

また、現に大式の郷里竜王町の山県神社内に残る数基の墓碑にも刻まれてある。

この紋章の点は、大式像として矛盾はない。これに対し香川修徳の家紋については、私は不幸にも何も知らない。修徳の瑩域嵯峨の二尊院に聞き合せて見たが残念ながら不明であった。また修徳の家系についても、皇国名医伝はじめ二、三の略伝だけでは詳細を知ることが出来ない。

ただ、香川姓一般については、太田氏の「姓氏家系大辞典」で見ると、香川氏には二系統があり、一は平姓、相州香川庄の鎌倉氏忠通から分れ、後三年役の勇者権五郎景政などの末であり、他の一は、讃州綾族の末裔とされ、或はその間に双方混淆しているとも云われる。また一方、渡辺三男著「日本の苗字」には、鎌倉氏そのものが源頼光満仲から分脈しているともいふ(源氏)。

古く、香川氏の家紋も尋ねれば、前記、鎌倉(平氏)は越後の長尾氏と共に、劍猪目、九曜巴とある(姓氏家系辞



(写真六) 「見聞諸家紋」

典)。天文の「見聞諸家紋」にも九曜巴、越後、長尾、香川五郎次郎和景、右京大夫勝元被官とある(写真(六))。

武家公家の紋章は鎌倉末期に創まり、江戸初期に固定したというが、賜紋、譲渡、信仰などの関係で随時幾多の改造ないし突然変化が起っているので、先祖代々継統するものは、大名などでも寧ろ少ない。一般人では猶更である。

無駄なようではあるが試みに、現代、香川姓で比較的近の人々に二、三の問合せを出したが桔梗紋との関係は今のところ出て来ない。

まず、西の香川発祥地讃岐の出身である大分県佐賀岡の香川哲男博士(外科)の家紋は金輪巴である。これは恐ら

く見聞諸家紋の「九曜巴」(九曜は細川氏か)の「巴」を今に伝えて残るものと思われ、東西出自の錯交を考える。

別に、讃州には九曜紋の香川氏があるという。

東の鎌倉香川氏発祥地、相州には「竹に雀」(後の長尾氏)が多く、明治の有名な書家香川松石の一族は豎三引両(小田原北条氏の賜と伝えられる)である。

周防藩士の出香川景矩の男で、漢詩人の故香川香南の家紋(甲府)は下り藤。

更に修徳(姫路)と同県の神戸市出身である、関西医科大学の香川輝正教授は由来カガミ神社々家の五三桐であったが、祖父の代から花菱を用いているという。

因みに、同じカガワでも賀川玄悦の系統は藤原秀卿の末流で、正しく桔梗である(明治前日本医学史第四巻口絵参照)。しかし調べが不充分的ゆえか、まだ「香川桔梗」は一例も見当たらないのである。

結局、姓氏(苗字)と紋章とを系統的に結びつけることは一般的には不可能であり、この場合は直接に修徳その人の家紋を捉えて、傍証とすることが唯一最後の決定となるであろう。

修徳の如き復古学者とすれば、或はその点で人の意表に出るかも知れないから、一方的に、桔梗紋即ち山県大武と決定する訳にはいかない。又もし双方が同じ紋章とすれば、また別の方面から判断しなければならぬ。

○

さて、一体、このような珍らしい肖像の錯誤が生ずる原因には、何か特殊な事情があったのでないか。

誰でも考えるのは次の事であろう。修徳と大貳との人事的交渉はどうか。香川修徳（一六八二—一七五五）は姫路の人、十八才で京都に出て、後藤艮山につき古医方を学び、伊藤仁齋に從つて儒学を修め、創めて儒医一本の説を立てた。

山県大貳（一七二五—一七六八）は甲斐の人、若くして郷土の儒医五味釜川に学び、江戸に出て、医官となり、後儒学の私塾を開いた。大貳は修徳に四十三年遅れて生れ、約三十年間同時人として存在した。

五味釜川（一七一八—一七五四）は江戸に出て、荻生徂徠の古儒学文辞派系統の、太宰春台の助教となり、帰郷して父に学び医師となった。

釜川は著名な碩学であったが、不幸にして躰が虚弱で三十七才で死んだ。

彼は、予ねてから、程朱の学を排し、ことに医学の面では独得の信条を固持していたので、「素問・靈枢は虚誕なり」と喝破した香川修徳を知るに及んで肝胆相照らし、東西学派の閥を越えて、その門に入って師を尊敬すること知らざるなかつた。このことは釜川の科学者としての偉大さを示すもので「寿香川先生七十序」（釜川遺稿）に感激をこめて書かれてある。恐らく修徳も同じ感激を似て迎えたことであろう。

即ち、大貳は修徳の孫弟子であった。

然しながら、儒医としての両者の関係は、釜川が宝暦二年修徳の門を叩いて後、僅か二年内外で死んだため、釜川を通じての修徳と大貳との医学上の連繋は、さほど密なものでなかつた。大貳は宝暦三年（推定）、「素難評」と「医事探乱」を書いたと云うが、その中で、「素問」・「靈枢」に対する批判は、修徳の大胆な説を意識しつつ、中庸的な態度をとっているかのようである（「飯塚・山県大貳正伝」）。しかし、それは、医家として今から見れば、古学派と古文辞派の差に外ならないと想われる。とにかく、両者の直接個人的往来は無かつたらしい。

さらに修徳と大貳の関係については、別に、釜川の門人として甲斐の市川大門の医師、広瀬保庵の四男、周平、広瀬中庵があり、この人が大貳と格別の親交があつた。中庵は、後に香川修徳の養嗣香川南洋（一七一四—一七七七）の門弟となつた（村松学祐著、甲斐儒医伝広瀬広一著、山県大貳遺著）。当時修徳は在世中であつた。

従つて、修徳の肖像（例えば七十賀の肖像など）が五味家或は広瀬家などに保存される可能性は充分ある。

また更に、大貳の方面から考えてみると、当時幕府に対する反逆示唆者と疑われて処刑されたのであるから、真影保持者は、少くとも明治維新近くまで、大貳の銘を秘していたに相違ない。

伝記を見るに、周辺の人達が、大貳一切の業績消滅に努め

たり、直系関係者らの姓を変えたり、墓碑の文字を削りたりした。

また、明治十年六月、天皇巡行の際、顕彰の沙汰があった時には、時の県令はじめ県内に大貳の墓さえ知る者がなかったという。(勤王の先駆、山県大貳「村松志孝著」)

その厳しい事情の中で、恐らく無銘でいづれにか匣底深く秘められていたものが、後に双方に関係のある者に依って同じ宝暦の修徳と誤まれたと云う見方もある。

いづれにしても、大貳肖像の発表は明治以後の事であるから、少し研究すれば、その真相が分らないことは無からうと思う。

○

筆を擱くに当り、不躰けな私の質問に対し親切な御助言を吝しまれなかつた已知未知の諸先生に厚く御礼を申し上げます。なお、この問題を発見提唱した同業の古守豊甫博士の慧眼に対し深く敬意を表し、また僅んで故恩師小川政修先生並びに畏友藤井尚久教授を追悼し御冥福を祈る。

(甲府市丸の内一丁目二一の六)

Summary

A question was raised recently by Dr. Komori, that one same portrait has been attributed to two different persons: Yamagata Daini, forerunner of the Meiji Restoration, and Kagawa Shutoku, famous Physician of the Edo-era. The author discussed in

this article, whether it shows Yamagata or Kagawa, chiefly by detailed study of crests of both families, reaching however to no clear conclusion. Additionally he guessed the reason, why this confusion occurred.

日本医学会例会記事

四月例会 四月二十六日(土)

於順天堂大学医学部五号館

一 河口信任と隠れキリシタン

川島 恂二

口演の詳細は本号に原著として収載。

二 寺門静軒と安藤文沢

小川 鼎三

順天堂第二代の佐藤尚中(一八二七〜八二)は下総国小見川藩の医師山口甫仙の子として生れ、幼にして江戸に在り、まず漢学を寺門静軒(一七九六〜一八六八)に受け、ついで医を安藤文沢(一八〇七〜七二)に学び、文沢の薦めで天保十三年十六才のとき薬研堀の佐藤泰然塾に入門したといわれる。

寺門静軒は江戸の生れで儒者として立ち(克己塾)、尚中が就いて学んだときは浅草新堀端、西福寺権現堂の西に住んでいたと思われる。

尚中の就学を天保七〜十年ごろとすると、静軒はそのとき四一〜四四才であった。谷中に建つ尚中の碑には、「老儒寺門子ニ從テ粗書史ニ渉ル」とある。静軒はそのころ江戸繁昌記第一〜第五篇を書き、次々に出版して有名になったが、この本が禍いして江戸に住めなくなり、天保十三年から諸地を放浪した。晩年には新潟にゆき半年滞在して新潟富史を書き、ついで武州妻沼の両宜塗で七年ほど教えた。慶応四年三月廿四日、いまの埼玉県大里村青山にて没した。同地の根岸友山の弟桂に彼の娘が嫁したのである。

安藤文沢は文化四年いまの埼玉県毛呂山町阿諏訪で生れ、西洋医術を修めて鳥羽藩主稲垣氏に仕えて、江戸の四谷で業を開いて

いた。豪放な人で、社会主義的な所があったという。後には種痘を熱心にやった。尚中が就学した時を天保十〜十三年とすると、文沢はそのとき卅三〜卅六才である。文沢は明治維新のさい五稜廓の戦争のあとで獄中にある荒井柳之助、大鳥圭介らの世話をした。

文沢の子、安藤太郎も榎本武揚の部下で官軍と戦った。太郎は後に外交官となり、妻文字とともに禁酒運動の先頭に立った。文沢の墓はいま杉並区永福町の理性寺にある。

佐藤泰然の門人小室潜庵は文沢の実弟と思われる。

六月例会 六月二十八日(土)

於慶応大学北里記念医学図書館第一会議室

一 小森桃鳩の「蘭方枢機」とブカンの家庭医学(予報)

大鳥蘭三郎

私の教室の蔵本に W. Buchan 原著の "Huislike Geneeskunde" と題するかなり分厚い一冊のオランダ語の医書がある。今回機会があつて本書についてすこし調べたところ、本書がブカンの "Doenstic medicine" のオランダ語訳本であること、その日本語訳本が小森桃鳩の「蘭方枢機」であることがほぼ分明したので、W・ブカンの略伝と併せてその調査のあらましを報告する。

二 古医書二種(写本)

「口中療治俗書」、「小児方録」

小川 鼎三

東大医学部学生丹波君よりその父上(大山市居住)が近年入手のものとして示された数点の医書の中で、ここに供覧する二書は字の書き方、紙質などより推して相当に古いものと思われる。年月の書き入れがないが、古書専門家某氏の鑑定によれば室町時代から江戸時代の初期までに属するだろうという。

山田平太氏の發表した口中書目録（明治前日本医学史第四卷四九〇ページ以下）にも「口中療治俗書」という題にちょうど一致するものは含まれていない。本書はおそらく兼康流の口中科を説いたものであるが、親康流、恩田流などとの区別が私には出来かねる。症候名の分け方は次のごとくである。

喉痺、喉風、牙齒、舌卷（したまき）、重舌（こした）、齒草（はくさ）、喉笛腫水、口熱、舌胎（したときき）、腭（あきと）、懸壅（けんやう）、唇裂、口草、……

右の分け方からどの系統に属するか識者の御教示を得たいと思ふ。

「小児方録」は終りの方に「右關東下総之国古河之香春庵（この一字やや不明確）之方不残尽写正本ニハ香春判有」と記されている。田代三喜が江春庵と号し、その子孫が医業を伝えて田代江春と称したというので、香と江と一字だけ違うが、田代三喜の小児科書と考えてよいのでないかと見当をつけた。

三喜の門で学んだ曲直瀬道三が「遐齡小児方」を著わしたことは有名であるが、それと内容を比較するのがだいたいだと思う。

「小児方録」に載る処方の一例を示すと

「せうに四五さいまで物いわさる時のくすり六一にんちん 一せんきう 一たうき 一にうこう 一おんし一ぱくもんどう一しやくやく右各々等分ニ丸之用ヘシ」

三 跡尋社長 吉益四峰の業績について

跡尋社長吉益四峰の業績

矢数 道明

明治初年漢方存続運動のため京都で結成された贅育社は、熊本
の春雨社とともに、東京温知社と呼応して共同戦線をとつてきた

ことは、人のよく知るところである。

然るに当時古医方の名門吉益家一族が、この存続運動に殆んど名を列ねていないのは、いかにも不思議なことであつた。

過般私は漢洋医学闘争史の著者、深川晨堂氏の残された資料のうち特記すべきものとして、表記跡尋社長四峰吉益鉄太郎の伝記があつた。以下深川氏の遺稿ともみられる草稿を努めて平易な文章に意識して述べてみたいと思ふ。

即ち吉益一族は漢方七科の医権恢復を目ざす温知社運動を離れて、漢方内科の確立を目標とする吉益独自の存続運動を、浅井国幹の帝国医学会解散まで続けたことが明かとなつた。以下その運動を続けた主人公、吉益鉄太郎伝を略記することにする。

跡尋社長四峰吉益鉄太郎略歴

（一八三四）
天保五年 11・20

伯耆国（鳥取県）東伯郡灘手村津原に生る。父は今井玄城、諱は哲、字は好宗、通称鉄太郎、号四峰、蓬生子、若くして大阪に遊学、吉益樗斎の門に入り、次いで京都、吉益復軒の門に転じ、古医方を

専攻す。

（一八六二）
文久二年

年二十八才、復軒抜擢して塾頭とし、長女を配して吉益の姓を嗣がしむ。

（一八七九）
明治十二年 3・11

東京に温知社、京都に贅育社、熊本に春雨社起こり、和漢医術存続運動を開始す。四峰は復軒と謀り、跡尋社を起こし、初め社を鳥取におき、後京都に移す。浅井国幹、四峰の加盟を促す。四峰「鶏口

となるも牛後となる勿れ」とこれを拒む。機関誌「医談」を発行、世人談、医師談の二益談に分ち、医師には東洋医師の職分を知らしめ、世人には正しい医療をうくる分別を教ふ。即ち「東洋内科道」と

(一八八三)
明治十六年

(一八九五)
明治二十八年

(一八九七)
明治三十年

(一九〇〇)
明治三十三年

(一九〇二)
明治三十五年

(一九二一)
大正十年

著書 雪窓論二卷・螢窓論二卷(以上四卷は傷寒論の正文を解釈す)

内科集成四卷・医事俗談二卷(東西内科の異同を論じ、漢方医道の新建設を主張)

診法一卷・刮目一卷(別名、統医断)その他数十種

門人に実吉順齋、税所謙齋、松崎正順、安井貞之助等を名あり。

(附記) 本稿の詳細については吉益家系図と共に『漢方の臨床』誌に掲載の予定。

「西洋内科道」の特質長短を説き、温知社運動の東洋七科の医権恢復を排し、東洋内科の確立を叫び、存続運動は漢方内科に限るべきことを唱えて終始一貫した。「対請願論」を発表し、天光界に牽牛界と織女界ありの比喻を以てす。

京都に「思誠病院」を開き、講学の機関として「補仁社」を設く。

漢医提出の医師免許規則改制法案、第八議會に於て一〇五―七八にて否決。

六月、帝國医学会は解散す。

京都跡尋社を高倉通四条南三八に移し、このとき「継興医報」に広告文を出し、第十一議會に請願運動を行なわんとす。

浅井国幹「墓に告ぐる文」を累代の墓に捧げ、存続運動終焉す。

浅井国幹没す。四峰尚運動を継続すという。

吉益四峰没す。享年八十八。

論文抄読

ウイリアム・ジェームス不在の米國精神病学

Ots M. Marx: American Psychiatry without William James. Bulletin of the History of Medicine. Vol. 42, No. 1, 1968, pp. 52—61.

この論文は著者がジョンス・ホプキンス大学医史学教室で研究し、一九六七年四月に第四〇回米國医史学会(ニュー・ヘイブンにて開催)で演説発表したものである。ジェームスの情動 emotion に関する学説は一八八四年に出され、またジェームスの代表作「心理学の原理」Principles of Psychology は一八九〇年に刊行されたが、当時の米國の精神病および神経学の雑誌 American Journal of Insanity 又 Journal of Nervous and Mental Diseases が如何ようにとりあげ、或いは紹介しているかを、一八八〇年代の半ばからジェームスの亡くなった一九一〇年まで雑誌の内容を詳しく吟味している、ジェームスの心理学は当然精神病学者が注目すべきものであるのに、右の期間に彼の名前が極めてわずかしか、これらの雑誌にでない。その理由として著者は、ジェームスの学説は精神作用の解明が広い立場からなさるべきで、簡単な略図的な定義はだめであるとした。簡単な考え方を求めていた当時の神経学者や精神病学者にはそれがむしろ脅威であり、敬遠されたのではないかという。

(T・O生)

日本医史学会関西支部例会

去る七月十三日(日)、午後一時より、ブルーハーヴェ生誕三百年の祝賀と阿知波五郎博士の「ヘルマン・ブルーハーヴェ」の出版を記念して、関西支部例会が開かれた。当日の演題は左記の如くであった。

- 一、「安留曼寸」の「和蘭外科免状」について
岩治勇一(大野市)
- 二、インドにアユール・ヴェエダをたづねて
石原 明(横浜市)
竹内真一(福井市)
- 三、戊辰戦争と福井藩
- 四、坪井信道のヒポクラテス賛詩について
中野 操(大阪市)
中山 沃(岡山大学)
- 五、新宮涼庭の内科則について
津田進三(金沢市)
- 六、ブルーハーヴェ万病治準(金沢本)と新宮涼庭の「痢論血論水脈論」について
大鳥蘭三郎(慶応大)
- 七、小森桃鳩の「蘭方板機」と W. Buchan の "Husliike Geneskunde" (第一報)
- 八、ゲーテをめぐる医師達
(その二)ゲーテがブルーハーヴェに傾倒した理由について
藤森速水(大阪市)
三木 栄(堺市)
- 九、Simplex Veri Sigillum

十月二十六日(日)午前十時より、大阪市南区牟田病院講堂で関西支部例会が開かれた。当日は今度、オランダで開催された日蘭交渉史のシンポジウムの出席者を囲んだ座談会の他、左記の発表が行なわれた。

- 一、ヘボンの沢村田之助の手術について
長門谷洋治(日生病院)
- 二、異形式抜歯鉗子の歯学史的研究
——オランダ渡来の提牙、取歯の器具と鑷(デウ) 鑷子(デウシ)について
杉本茂春(大阪市)
- 三、坪井信道の日習堂塾創立の時期について
中野 操(大阪市)
青木一郎(岐阜県)
- 四、坪井信道の系譜
黒川良安と坪井信良——坪井信道伝補遺
津田進三(金沢市)
- 五、医学史における時代区分
三木 栄(堺市)
- 六、三重県尾鷲市三木里における医師の戒名について
茅原 弘(津市)
- 七、神農伝説と神仙思想
宗田 一(阪大医)
- 八、神農伝説と神仙思想

日本医史学会評議員
日本眼科医会参与
東京眼科医会監事

故 鮫島近二先生略歴



明治二十二年八月三日

〃 四一年

大正一年

〃 一二月一二日

鹿児島県垂水市牛根町麓に生る。

鹿児島県立第一鹿児島中学校卒業。

熊本医学専門学校卒業。

第三一〇六八号を以て医籍に登録。

京都市帝国大学医学部眼科教室

市川清教授のもと眼科学研究。

癩性眼疾患の研究にて学位取得(京大)

昭和一二年

〃 二〇年

〃 二二年

〃 四四年五月一日

主論文『癩性眼球的組織学的研究』(日本眼科学会雑誌三六卷二五五—二八八頁)。京都赤十字病院眼科医長、

東京都港区芝桜川町にて眼科開業、

前橋赤十字病院眼科医長、

東京都新宿区下落合一—四五〇にて眼科開業、

午後一〇時三〇分、東京都新宿区下落合一—四五〇の自宅で肺線維症のため

逝去、享年七九才、戒名、慈光院寿誓

仁道居士、

此の間、日本眼科医会参与、同地区(新宿)連絡委員、東京眼科医会監事、日本医史学会評議員、新宿区眼科医会会長、新宿区学校医会理事、等々歴任、

昭和四一年八月一四—一九日、西ドイツ国、ミュンヘン市で開催された第二〇回国際眼科学会に日本参加団の一員として出席、掃途欧米各地視察、

昭和四三年、シンガポールにて開催のアジア太平洋眼科学会に出席、東南アジア眼科親善親察、

又、三十数年間に亘り、鹿児島医学に縁り深きウイリアム・ウイリスの事蹟研究を続行。

先生は鹿児島ので、九州男子の典型的の竹を割ったような人格者であった。九州より笈を負って京都大学眼科教室に入り、市川清教授に師事された。それで人がいやがる癩の眼疾を

数年に亘りよく研究され、時には瀬戸内海の小島に癩の療養所をたずねて、泊り込んでよく、具に調査研究された。その立派な研究論文を完成されて日本眼科学会雑誌に発表され、誌上をにぎわされた。これを以て京大眼科より医学博士の学位をおくられた。

その後、さきには九州より京都に上られて研究生生活を送られたので、次には京都よりさらに東京に上られて先ず芝の岡山博士の没後の診療所を引受けられて戦争まで開業された。その頃より英人ウイリスの事蹟を調査研究された。この研究の熱烈でしつこいことは驚くべきものがあつた。これについては数々の論文を日本医史学会雑誌を始め、日本医事新報などに発表されてゐる。このウイリスの研究は三十数年に及ぶ永い永いものであつた。先年独乙国、ミュンヘン市で国際眼科学会が開かれた時も、筆者も同行したが、先生は国際眼科学会よりもウイリ

スの方が夢中で、一行がドイツ、フランスと視察中もロンドンにてウイリスの事蹟をしらべ、その診療所の跡をたずねるなどのことを一人でなされたのには驚いた。ウイリスに関する先生の論文は私が知る限りでも二十数篇を数えるに及んでゐる。これが毎日の御多忙の下落合（戦後、下落合に開業された）の日常診療の間に三十数年の長きに亘り研究されつくされた。これには地下のウイリスも驚いてゐることであつたらう。

昭和四四年五月、ふとした風邪がもとで肺炎をおこされて幽明境を異にすることとなつてしまつたが、二日程前まで患者の診療をされてゐた。その責任感のつよいことは何人も驚くばかりであつた。

御令息は化学専門の理学博士である。

論文抄誌

Reginald S. A. Load: The White Veins: Conceptual difficulties in the History of the Lymphatics, *Medical History*, Vol. 12, No. 2, pp. 174—184, 1968.

リンパ系の存在が明らかとなつたのは他の脈管系よりずつとおくられて十七世紀になつてからである。

古代アリストテレスやヒポクラテスの記載の中にリンパ管

を指しているかと推定されるものがあるが断定できない。アレキサンドリア時代になると、解剖で有名なエラシストラトスとヘロフィリスが乳糜管を見ているが、これを静脈の一種としてゐる。ガレヌスはこの乳糜管が門脈を経て肝臓に入り、肝臓で造血が行われる従つて循環系の中心が肝臓であるという学説をたてた。これが中世を支配し、ハーヴェイの発見にまで続いたのである。

十六世紀にオイスタキウスは馬の胸管とこれが頸静脈角に

入ることを発見した。

十七世紀に入り、アセリーが犬の乳糜管とアセリーの腺臓、つまりリンパ腺を見つけ、乳糜管は静脈と機能的に異なるもので吸収作用のあることを述べている。

一六四九年にはベケが乳糜管と胸管が繋がっていること、従って乳糜は肝臓に直接入らず頸静脈角で静脈に入ることを発見した。

これはガレヌスの循環説を根底からくつがえすことになる訳だが、先のアセリーの所見に対してはハーヴェイは批判的立場にあった。

リンパ管という言葉は一六五二年のトーマス・バルトリンが著わした本の中に *Vasa Lymphatica* とあり、これが用いられるようになった。

一六六年ルイシュがリンパ管の弁の形態と機能について報告している。

しかし、リンパ系の問題はすべて解決されたわけではなく、現在までガンの転位の過程、リンパ管静脈結合の問題が残されている。(S・S抄)

論文抄読

Alexander Borodin, the Scientist, the Musician,
the Man.

Janies, C. Cole, M. D.

JAMA April 7, 1969 Vol 208, No. 1 129—130

一八八七年三月十九日号の *Lancet* 誌にボロディン教授の訃報が掲載され、その突然の死が悼まれた。

ボロディンは生涯を通じて医学と音楽の二つの道を歩んだ。九才でホルカを、十三才でフリュートとピアノのためのコンチェルト、ヴァイオリンとピアノのためのトリオなどを作曲しており、同時に実験の好きな彼の室は手作りのビーカーやフラスコで一杯であった。

一八五〇年十六才の時ペテルスブルグの医学校に入ったが、そこには後年合成色素の分野の基礎となったアニリン誘導体の研究で名のあった Zein 教授がおり、その影響を大に受けた。

一八五六年ペテルスブルグ陸軍病院インターンを終了したが、ここで十七才の陸軍士官ムソルグスキーと知り合った。

一八五八年に「亜砒酸と燐酸の相似性」のテーマで博士号を取得したが、師 Zein 教授はボロディンの音楽への熱情を断ち切らんと Mendeleer と共にヨーロッパに遊学させた。

一八八九年ハイデルベルグ滞在中カテリーナ・プロトポポバと知り合い一八六三年に結婚した。この間有機窒素の定量法を確立した。一八六二年ペテルスブルグに帰り母校の教鞭を取ることにになり、以後 β -hydroxybutyric aldehyde の研究に取り組んだ。

一八六二年ムソルグスキーはボロディンをバラキレフに紹介したが、バラキレフこそ彼の音楽の師となった。音楽以外の仕事として女子の医学校への入学運動に熱心であり、これは一八七二年に漸く実を結んだ。この年にシンフォニー短

調を作り、オペラ「イゴール公」の作曲に着手した。

一八八七年再びドイツに旅し、各地の病院や研究所を訪れたが、この時初めてリストに会った。この後ポロディンは化学研究に作曲に、医学教育に努力を惜まなかったが、一八八七年二月十六日舞踏会に出席中突然倒れ間もなく死亡したのであった。男子一生の仕事は素質と環境によって最も適した領域での活発な確固たる活動にあるというカーティルの言葉を信ずるならば、医学、音楽教育と全く異った分野で仕事をしたポロディンの才は決して浪費されたとは言えない。

(A・M)

論文抄読

Mary A. B. Brazier : the History of the Electrical Activity of the Brain as a Method for Localizing Sensory Function. Medical History, Vol. 7, pp. 199—211, 1963

大脳皮質の機能の局在を確認していく歴史にはその活動電位の発見の歴史を欠くことができない。

人間の脳皮質で機能局在が問題となった最初は Broca の言語中枢であった。

大脳生理学は Golz が除脳した犬を長期生存させることに成功したことから発展したが、大脳皮質の機能局在に関しては一八七〇年 Fritsch と Hitzig が露出した大脳皮質に電気刺激を与え脚が動くことを発見した時から始まる。この仕事

は Ferrier が継承し、大脳皮質の様々の個所を刺激しその結果対応した運動が起る事をまとめて発表した。これに対し当時の権威者は大脳皮質は単に刺激を通過する場所にすぎず白質が興奮し、次いで基底核が刺激され運動を起すと論じている。

一八四〇年頃より末梢神経の興奮が電気的にとらえられるようになってきたが、これが脳で見られたのは一八七五年の Richard Caton が家兎の大脳皮質の後外側部が光刺激で電気的変動が起ることを記録したことに始まる。更に十五年後、ポーランドの Adolf Beck が全く独自に犬の大脳皮質が光・音の刺激に対応して夫々特定の場所に活動電位が認められることを詳細に報告した。

このようにして大脳皮質の知覚刺激を受け取る部分が限局してゐる事が確認されたが、これを更に発展させたのがロシアの Becherev の弟子 Larinov であつた。彼は師の理解と援助をうけて実験に技術的改良を加え、家兎の聴覚領に音程の差による局在性のあることを示した。

一方、脳波については Caton がその存在を記し、Beck はそれが外部刺激が加わつた時に desynchronization が起ることを記載しているが、この原因が上行性網様体系の刺激によることは六十年後の Magoun まで待たねばならなかつた。

(S・S抄)

*

*

阿知波五郎著

ヘルマン・ブールハーヴェ——その生涯、思想、
そして蘭医学への影響——

阿知波五郎先生がブールハーヴェ（一六六八——一七三八、以下ブと略）生誕三〇〇年の昨昭和四三年から遅れること僅か数カ月にして、ついに念願の著を明らかにされた。

「ヘルマン・ブールハーヴェ Herman Boerhaave——その生涯、思想、わが蘭医学への影響——」と題されたこの著は、文字どおりブ学の集大成であつて、ことにわが蘭医学への影響については、世界医学史の見地からもはなはだ興味深い、かつ重要な指摘がなされている。すなわちブの医学、思想がわが国にアメリカと同時代（一七六五）に移入、定着したとするものである。

阿知波先生は京都で開業する在野の医史学者であるが、とくに医学思想史という根原的な問題を、豊富な資料と、鋭い史眼と、卓越した語学力で解明せんとしておられる。その先生がブにたどりつかれたのは当然の帰結であつたといえよう。

ブが最初ライデンで男女各六床のベッドで始めた実地臨床教育（一七一四、著者はこれをベッドサイド・ティーチングと表現している）は医学の近代化の一步であつた。「全欧州の師表」と仰がれた彼のもとには優れた人々が集まり、のちにライデン学統とよばれた巨大な学統を築いた。とくにウイ

ーン、ベルリン、エジンバラ、フィラデルフィア、日本などにそれが著しいが、エジンバラ大学、ペンシルバニア大学は夫々英米の医学の中心地の一であり、著者の研究ではペンシルバニア大学の医学が、明治初期に盛んにわが国に紹介されており、わが国はここでも間接的にブの影響を受けていることになる。

このブの遺跡、そして学統のひとつひとつを自分の目でたしかめたいという欲求が、ついに著者を外遊せしめるに至つた。昭和四〇年五月のことである。綿密にたてられた計画と、各地で著者を暖く迎えた友人たちの好意で、きわめて充実したみのり多い旅行となつた。本書巻頭にはこのときの旅行記がおさめられている。淡々とした筆致だが、著者のよるこびと心のたかぶりがそのまま伝わって来、しかもこれを読むだけでもブについてよく知ることができる。心にくいばかりの構成である。

本書はつぎの各章よりなる。一、ライデン学統巡り 二、世界医学史から見たブ 三、ブ時代の背景 四、ブの思想 五、わが蘭医学に及ぼした蒲爾花歌の影響 六、ブ伝

最後の伝記は Wm. Burton 著とされる。"An Account of the Life and Writings of Herman Boerhaave" (ロンドン、一七四三)の訳であるが、著者は多年この著を探し続けてきた。そして上記旅行のさう G. A. Lindeboom (アムステルダム)の自由大学医学部内科学教授。現在もつとも著名なブ学者の一人。昨年ブに関する著書公刊。本書に序文を寄せている。より、同教授蔵の同書のコピーを贈られたのを邦

訳されたものである。

著者の説くところによれば、ブはヒポクラテス・パターン
の人 (Hippocrates—Sydenham—Boerhaave—Hufeland—Osler) であり、「単純は真理のしるしなり Simplex Veri Signum」を座右の銘とし、物理学的、数学的世界観を医学に導入し(たとえば顕微鏡、体温計などの最初の臨床的応用) 病理解剖を重視し、人体における原子論的実体把握に努力した。彼は化学者、植物学者(なおリンネとは特別の関係にあった)としてもすぐれた存在であり、哲学、宗教にも格別の関心と素養があった。著者はこの多面的な才能と活躍を示したブを思想家という観点からとらえた。

彼をうきぼりにするために多彩な人々が登場する。スピノザ、ロック、デカルト、レンブラント、シデナム、ボイル、ニュートンらの各であるが、浅学の悲しさ、著者がかんりの力点をおいて説くこの部分を読みこなし、ここに紹介するだけの能力がない。ともあれ、著者はブの行なったベッドサイド・ティーチングに近代化の萌芽がすべて胚胎されているとし、彼の医学が血の通った患者——人間を対象としていることに大きな共感を覚えている。

著者はあるとき坪井信道の稿本「蒲蘭花歌、万病治準」二二冊(一八二七)を入手した。同じころ京大でブ著の“*Institutiones*”(ラテン語)の蘭訳本(新宮涼庭の手沢本)を見出し、さらに東北大でブ著“*Aphorismi*”の蘭訳本(Van Swietenの注釈入り)を発見した。そして信道の訳したのは後者、すなわち「箴言」であることを確認、ブを正式にわが

国に紹介したのは坪井信道であるとした。また信道の「万病治準」の他に新宮涼庭の「万病治準」があつて、それは“*Institutiones*”の訳であるとするものがあるが、著者は存在そのもの否定し、涼庭は原書を参考書に用いたが訳著はない。強いていうなら「血論」「生理則」の二(ともに写本)が抄本であるとする。また坪井信道に「診候大概」の著があり、これは近代医学的なものとして従来より高く評価されるが、訳著であるとする者が多い。著者はこれに対し信道が万病治準訳した後、その全巻をよく消化した上で、改めて大意をまとめたものであるとする。

その他、ブおよびその学統諸家の著およびその思想が蘭医を通じて、あるいは小森桃塙、吉田長淑らの論著により、一八世紀中葉から一九世紀中葉にかけて盛んに紹介、受容される史的過程を明快に述べている。

本書は英文抄録まで付した学術書であるが、各章トビラには各々異なったブ像を配するなど、著者のブへの傾倒ぶり、本書にかけたなみなみならぬ熱情が、各所はほとぼり出ている。筆者はしかしつねに冷静を保ち、慎重に発言している。それでもあとがきの中で「現在の日本の医学界でブを顕彰しようとする動きがありませんし、よし一個人だけを顕彰することが無意味だとされるならば、せめてブ医学なり、ライデン学統医学を検討する動きがあつてもよいと思いますが、これさえありません。それよりも現在の若い医学徒の間にブを知っている人はほとんどあるまいと思われます。若い医学徒にそうした余裕がないのでありましよう」と述べざるを

えなかつた。われわれはこの提言をきいてますますに立ちあがるべきであらう。

最後に現在の華やかな出版文化を背景に、この価値高き書が自家出版されたことを問題にしたい。この壮挙に対し、評者は著者が本書中でブが名著の復刊などをしたところで述べているつぎのことを、そのまま著者にささげたいと思う。「この（復刻や）自家版に費した金額は巨額に上る。この（多数の）出版の壮挙は知性だけではなく、よほどの学問に對する熱情と決断と実行力の結果であらねばならない。」

（昭和四四年、東京、緒方書店。B5判、二一五頁。横組写真六四、表八 希望者は日本医史学会へ。頒価 千円）

（長門谷洋治）

書評

阿知波五郎著「ブルー・ハーヴェーその生涯、思想そして蘭学への影響」

十八世紀の巨大な医学者として一世を風靡したヘルマン・ブルーハーヴェーに関する表記の本が篤学の人阿知波博士によって著わされた。これはブルーハーヴェーの生誕三百年を記念して企てられたものであることは著者のあとがきの日付けによって明らかである。

阿知波博士は本誌に度々掲載された研究論文によっても知られるように永年に亘って西洋医学思想の日本伝来について調査、研究を続けられて来た。この意味において本書はまこ

とによき著者を得たといわなければならぬ。

本書の記述は六編に分れている。第一編 ライデン学統巡り、第二編 世界医学史から見たブルーハーヴェー、第三編 ブルーハーヴェー時代の背景、第四編 ブルーハーヴェーの思想、第五編 わが蘭学に及ぼしたブルーハーヴェーの影響、第六編 ヘルマン・ブルーハーヴェーとなつてゐる。

各編共いづれも珠玉の佳編であるが私共にとつてことに重要であり、とり分けありがたいのはその第五編である。この編で博士は博引旁証、ついにブルーハーヴェーの医学説のわが国における最初の形跡をつきとめられ、それを明らかにされた。博士のこれについての功績は高く評価されねばならないし、その労を多として敬意を新たに表したい。（R・O）

このたび、阿知波五郎氏は日本医学会より日本医師会最高優功賞開業医師であつて学術貢献著しい功労者を受賞された。これは日本医史学会の推薦によるもので、慶賀の至りである。（編集委員記）

* * * * *

日本医史学会々則

第一条 本会は日本医史学会と称する。

第二条 本会は医史を研究しその普及をはかることを目的とする。

第三条 本会は前条の目的を達成するため、次の事業を行なう。

- 一、年一回、総会を開く。
- 二、本会の機関誌として『日本医史学雑誌』を発行し、これを会員にわかす。
- 三、随時、地方会、例会を開き、研究発表、展覧などを行なう。
- 四、日本の医史学を代表して内外関係學術団体との連絡協力をはかる。
- 五、その他の事業。

第四条 本会の主旨に賛成しその目的達成に協力しようとするものは、理事または評議員の紹介を経て会員となることができる。

第五条 会員は会費として年額一五〇〇円を前納する。ただし外国に居住する会員は年額一〇ドルとする。

会員は研究発表および本会の事業に参加することができる。

本会に名誉会員と賛助（維持）会員をおくことができる。名誉会員は本会の事業に多大の貢献した者を評議員会の議をへて推せんする。賛助会員は本会の趣旨に賛同し、年額一万円以上を収める者とし評議員会の議をへて推せんする。

第六条

本会に次の役員をおく。

- 一、役員は理事長、会長、理事、監事、幹事とする。
- 二、理事長は一名とし理事会で互選し本学会を代表する。
- 三、会長は年一回の総会を主催し、その任期は総会終了の日までとする。
- 四、会長は理事会の推せんにより理事長が委嘱する。
- 五、理事は若干名とし、理事長を補佐し会務の遂行にあたる。

理事、監事は評議員会の中より評議員会の推せんにより理事長が委嘱する。

五、本会の実務を処理するため、常任理事二名、幹事若干名をおく。常任理事は理事より、幹事は

会員より理事長が任命する。

六、役員は任期は二年とし重任を妨げない。(ただし会長を除く)

以上の役員は総会の承認を得るものとする。

第七条 評議員は若干名とし、普通会员の中より理事会の

推薦により総会で決める。

評議員会は本会の重要な事項を議決する。任期は役員に準ずる。

第八条 本会の事務所は順天堂大学医学部医史学教授室内

(東京都文京区本郷二の一)に置く。

第九条 本会は理事長の承認により支部または地方会を設

けることができる。

第十条 会則の変更は総会の承諾を要する。

『日本医史学雑誌』投稿規定

発行情日 年四回(一月、四月、七月、十月末日)とする。

締切は発行月の二か月前とする

投稿資格 原則として本会々員に限る。

原稿形式 原稿は他雑誌に未発表のものに限る。和文の表

題、著者名のつぎに英文表題、ローマ字著者名

を記し、本文の終りに英文抄録を添えること。

原稿は二百字または四百字詰原稿用紙に縦書きのこと。

原稿の取捨選択、掲載順序は編集委員が行なう。また編集の都合により加除補正することもある。

原稿枚数

表題、著者名、本文(表、図版等を除く)で三印刷ページ(四百字原稿用紙で大体七枚)までは無料とし、それを越えた分は一印刷ページあたり一五〇〇円を著者の負担とする。

校正

原著については初校を著者校正とし、二校以後は編集部にて行なう。

別刷

投稿者には論文掲載紙を五部無料贈呈する。別刷希望者には五十部単位で実費にて作成する。

原稿送り先

東京都文京区本郷二丁目一の一
順天堂大学医学部医史学教授室内 日本医史学

会

編集委員

大鳥蘭三郎(委員長) 石原明 杉田暉道 大塚恭男 酒井シヅ

国際医史学会総会開催について

第二二回国際医史学会総会開催について去る四月十九日(土)にパリで開催された理事会で左記の事項が決定された。

開催地 ルーマニア国、ブカレスト及びコンスタンツァ

開催期日 一九七〇年八月三〇日—九月五日

会長 Valériu BOLOGA 教授 (国際医史学会副会長)

副会長 Benone DUTESCU 教授

幹事 Vasile MANOLIU 博士

事務局 XX IIe Congrès international d'histoire de la médecine, uniones Societatiler de Stiinte medicale, Strade Progresului 8—10, BUCAREST (Roumania)

テーマ一、医学の本分 (déontologie médicale) の歴史

二、民間療法の科学的価値

三、あらゆる時代を通してのルーマニアと世界各

国との医学的關係

四、ローマ帝国の諸地方の医学

五、その他

演題締切 一九六九年九月十五日

抄録締切 一九六九年十二月三十一日

(発表は一人一題、十分以内)

参加費 国際医史学会々員は四十ドル、非会員四五ドル、

会員同伴者 二十ドル

会期中に学会発表の他に音楽会、遠足などの催しが行われる予定である。

更に、一九七二年の第二三回国際医史学会総会はイギリスが候補地となり、会期は九月頃が予定されている。その時のテーマは

一、医学への英国の貢献

二、英国の医学と諸外国の医学との関係

三、医療看護 (soins médicaux) の歴史—病院、社会医学、地方および国家的構想

四、その他

であることが POYNTER 博士より報告された。

尚、国際医史学会々費は年間四ドルです。同会入会希望者および国際医史学会総会参加希望者は日本医史学会事務局所までに御申出ください。

日本医史学会役員氏名 (五十音順)

理事長 小川 鼎三
 常任理事 石原 明 大鳥蘭三郎
 理事 長 鈴木 宜民
 会 長 鈴木 宜民
 常任理事 石原 明 大鳥蘭三郎
 理事 長 鈴木 宜民

赤松 金芳 阿知波五郎 今田 見信
 石川 光昭 内山 孝一 大久保利謙
 大塚 敬節 大矢 全節 緒方 富雄
 岡西 為人 蒲原 宏 佐藤 美実
 杉 靖三郎 鈴木 正夫 鈴木 勝
 宗田 一 竹内 薫兵 津崎 孝道
 戸刈近太郎 中野 操 三木 栄
 矢数 道明 吉岡 博人 和田 正系

幹事
 大塚 恭男 酒井 シヅ 杉田 暉道
 谷津 三雄

日本医史学会評議員氏名 (五十音順)

安芸 基雄 石田 憲吾 今市 正義
 岩治 勇一 王丸 勇 大塚 恭男
 金城清松 久志本常孝 榊原悠紀田郎
 清水藤太郎 杉田 暉道 鈴木 宜民
 高木圭二郎 高山 担三 田中 助一
 津田 進三 中泉 行正 中沢 修
 中山 沃 長門谷洋治 服部 敏良

福島 義一 藤野恒三郎 丸山 博
 松本 明知 三浦 豊彦 三廻 俊一
 森 優 谷津 三雄 山形 敏一
 山下 喜明 山田 平太

「日本医史学雑誌」のバックナンバーについて

日本医史学雑誌五卷一号(復刊一号) | 昭和二九年一から十四卷四号 | 昭和四三年一までのバックナンバー揃いを一万五千元一巻を千五百円、一号を四百円の会員価格で頒布しています。御希望の方は日本医史学会事務所宛に申込み下さい。

第七〇回日本医史学会

総会記事追加

江戸時代における京都大阪の歯科医について19の質疑に対する応答

一、歯と牙の区別について寛政十一年嘉永七年刊無冤録述の中に 上下牙齒 ハラクバ歯ハマヘバ と明記している

一、初学人身窮理(明治九年刊)に 上下八枚ノ前齒ヲ「インシツソル」ト云ヒ次ノ上下四枚ヲ「コスピット」ト

云ヒ次ノ上下八枚ヲ「バイコスビツト」ト云ヒ次ノ上下八枚ヲ「モラルス」ト云フ又別ニ上下四枚ノ奥齒ヲ「ウイズトム」ト云フとある

一、牙科について瘍科秘録に「牙科^{ハスキ}」齒を抜ク器具を「牙科^{ハスキヤ}矢」とある

一、種齒(いれ齒 入齒)について 陸游の詩「卜塚治棺輪ニ我快ニ染鬚種^ニ齒笑ニ人癡」の自註「近聞有^レ医以^レ補^ニ啞齒^ニ為^レ業者」とある

昭和四十四年十月二十五日 印刷
 昭和四十四年十月三十日 発行

日本医史学雑誌

第十五卷 第三号

編集者代表 大 鳥 蘭 三 郎
 発行者 日本医史学会
 印刷者 代表 小川 鼎三
 發行所 日本医史学会

東京都文京区本郷一ノ二
 順天堂大学医学部医史学
 教室内
 郵便 番号 一三番
 振替 東京 一五二五〇番

and to prepare for Harvard. He became ill with fever in France and a large carbuncle developed in his right armpit. This tumor was incised and drained by two French doctors named Peau and Villon. The abscess would not heal, and the boy became progressively worse. He was moved to London. There he was attended by several famous London doctors, including Sir James Paget. The boy gradually became cachectic and the cause of death was "carbuncle with pleurisy." How much this extraordinary person might have contributed to the welfare of the world if his life might have been saved by drugs like Penicillin and Streptomycin is anyone's conjecture; the same may be said of his Uncle Willie.

After Jack's death, Robert Lincoln was despondent much of the time, and a manservant was constantly at his side to prevent a possible suicide. He died at age 83 at his summer home in New Hampshire, of a cerebral hemorrhage.

Aristotle said, in effect, that the reason why people enjoy tragedies is that the painful actions and problems of others, which excite pity and fear in the observer, may purge him of these emotions. Perhaps the great popularity of the Lincoln family story may in part be explained by this Aristotelian hypothesis. Certainly no family has suffered and died more sadly than did the Lincolns, and none seems less to have deserved such a fate. Perhaps grievance for the Lincolns may challenge us all to increased sympathy, ruth and compassion. (小野譲抄録)

本稿の内容は日本医史学会の昭和44年1月例会で報告した。

professor of Medicine in George Washington University, was the Lincoln family doctor. Willie became progressively worse and died 17 days later. It would appear to us more probably that he died from pneumonia, and that he had been weakened by preceding, recurrent respiratory infections.

Much more has been written about Thomas (Tad) Lincoln than any of the other brothers. Dr. Wallace also officiated at his birth in 1853.

"Tad's" father said that he had "a head like a tadpole." He had a mild cleft palate and talked with a lisp. He was mischievous, incorrigible and would not study. Like Willie, he had frequent bouts of fever. He was sick when Willie died in Washington and he was scheduled to accompany his father to Gettysburg on the day of the famous speech, but became ill and could not go.

Lincoln was murdered at age 55 just as the American Civil War was concluded and at the height of his world prestige. After the President's death, Mary Lincoln was distraught, restless and generally mixed-up. She sailed for Europe in 1867 to place Tad under English and German tutors. Tad was sickly most of the time and developed signs of pulmonary tuberculosis while he was in Europe. He and his mother returned to Chicago in 1871. Tad was under the care of several famous Chicago physicians, including Dr. N. S. Davis, one of the founders of the AMA as well as of Northwestern University Medical School. When Tad died in July of 1871, at the age of 18, the official diagnosis was "pleurisy and dropsy of the chest," but there seems little doubt today that he had tuberculosis. Tad's death later precipitated a complete nervous breakdown in his mother, causing her to be committed to a private sanitarium.

Robert Lincoln, the oldest son, lived to the ripe age of 83. He remained aloof, was considered somewhat eccentric, and is said to have been embarrassed by his father's backwoods background. Robert Lincoln had contact with some of the great names in Chicago medicine, such as Billings, Beven and Murphy.

One of the most lamentable premature deaths was that of Abraham Lincoln II, called "Jack," son of Robert. Jack was said to have been a truly gifted, precocious child, the reincarnation of his grandfather and namesake. While his father was serving as Ambassador to the Court of St. James in London, Jack was sent Versailles in order to study French

to call on several prominent doctors as family physicians. It appears that the most frequent prescriber for the Lincoln family was amateur Abe himself. He made frequent purchases at a Drug Store, the accounts of which have been preserved. Among the medicines that Lincoln purchased were castor oil, calomel, Dr. Jaynes' carminative, Brown's mixture, cough candy, spirits of camphor, glycerine, ipecac, paregoric, Wright's pills, pennyroyal and much brandy.

Of Abe's and Mary's four sons, only Robert reached maturity and Robert's only son, Abraham Lincoln II, died at the age of 16.

Robert Lincoln was born in the Globe Tavern in Springfield exactly nine months after the hectic marriage of his parents. At that time, Dr. Anson G. Henry had been a student of the great Dr. Daniel Drahe of Cincinnati. Mrs. Lincoln wrote that Dr. Henry was her dearest friend.

Robert was an introspective, undemonstrative, shy youth, who had a divergent eye. When he was fifteen years old, he was bitten by a dog presumed to be mad. His father took him to Terre Haute, Ind., to have a mad stone applied to the wound, to draw out the green poison and prevent hydrophobia.

When the next son, Edward Baker (Little Eddie) came along, the Lincolns were becoming prosperous. Eddie was said to be a "sweet" boy. His death, which occurred in 1850, was perpetually lamented by his parents. In Lincoln's farewell address to his friends in Springfield, he said, "Here I have lived a quarter of a century—and here one child lies buried." Lincoln himself wrote that the boy was sick fifty-two days and that he died from "consumption". Brother Tad probably died from TB and Willie, the other brother, died from some type of respiratory infection. It seems probable that Robert's son, Abraham II, might have had tuberculous empyema.

The third son, William Wallace Lincoln, "Willie," was born in 1850, not long after the death of Eddie. He was named after Dr. William Wallace who was by this time the family doctor. He officiated at Willie's birth. Willie was a handsome, precocious, energetic and lovable boy. He suffered repeatedly with spells of fever.

About a year after the Lincolns were settled in the White House, Willie contracted a cold while he was riding horseback. Dr. Robert Stone,

ABRAHAM LINCOLN'S FAMILY DOCTORS

E. F. Pearson, M. D.

Springfield, Illinois, U. S. A.

The essential elements of early Greek tragedies rested on an inner triumph in spite of outward defeat. The Lincoln tragedy is quite opposite, with outward triumphs that have favorably influenced the entire human race but brought complete inner defeat and death to Lincoln and his family. The sublime tragedy of the Lincoln family story reaches its full impact when we recall the lamentable early deaths of four of the five Lincoln sons.

Nearly everything that even remotely involved Abraham Lincoln is of great interest around the world. More has been written about Lincoln than any other person who has lived on this planet with the possible exception of Jesus Christ.

Abe was a strong young man, but became a self-styled hypochondriac and had several fits of deep depression. He suffered greatly with each of his children's illnesses and deaths. His wife Mary was a vivacious, gracious and extraordinarily ambitious young woman. She was forced to watch three of her four sons die and to see her husband murdered. These bombardments of psychic trauma completely broke her. She was committed for a while to a mental hospital and her last years were most unhappy.

The health problem of the Lincoln family encompassed the amazing period of transition in medicine from the backwoods of Kentucky and the rugged frontier town of New Salem, through the rising status of medicine and increasingly well educated doctors in Springfield, on to contact with sophisticated 19th Century medicine in Europe and vigorous young Chicago.

Lincoln himself had close personal relationships with many doctors of strong personality, and the family, while living in Springfield, had reason

朝夕一杯！ 中将湯が

貴方の健康をととのえます

婦人良薬

中将湯

150円・300円

頭痛・肩こり・冷え
生理痛・生理不順
めまい・産前産後
更年期障害に

17種の薬草を一錠に

中将湯の錠剤

コムール

200円・500円・1000円



株式会社津村順天堂
東京都中央区日本橋通3～8

110,000 医家の週刊医学雑誌

最も親切なる臨牀医家の好伴侶

毎週土曜日発行

定価 5部 195円

三、二〇〇円

送料 18円
送料 18円
送料 18円

週刊

日本医事新報

清新潑刺・充実無比

— 新らしき医学の動向を知るために —

「学説」「学会印象記」「カラー・グラフィック」「MEDICAL・ESSAY」「時論」「ニューズ」「学会案内」「学位授与」「一週一話」「私の考え方」「質疑応答」「閑窓夜話」「お茶水だより」「人」「医事案内」その他

— 医家必読の有益記事全誌面に満載 —

東京都千代田区神田駿河台2の9
電話 東京(292)1551(大代表) 振替東京 25171番

日本医事新報社

診 断 と 治 療

臨床家、医学研究書必読の総合臨床誌。毎号特集に重点をおき、臨床講義、目でみるページ、国際治療談話会、臨床例、臨床研究等盛り沢山…
日進月歩の医学を知る好伴侶。毎月毎月自然血となり肉となる絶好の総合臨床誌。

予約購読料 半年 2100 1年 4200

産 科 と 婦 人 科

30有余年の歴史をもつ産科と婦人科の臨床誌。特集号は申すまでもなく
総説、臨床研究、他科との接点、ダイジェスト、Slide Conference、症例、
薬剤の臨床等多忙な日常の先生もこれだけは是非目を通して頂きたいものばかり。

予約購読料 半年 1800 1年 3600

小 児 科 診 療

特集、診療と研究、海外小児科展望、学会抄録等小児科医が日常診療
に従事する上に必要な診断治療のすべての問題を余すところなく提供、
本書によって良心的な小児科診療を!!

予約購読料 半年 1800 1年 3600

外 科 診 療

外科の核心は手術である。毎号特集に焦点を合わせ Clinical Conference
他、多くの写真、図をもって解説してあり、外科、整形外科、泌尿器科
医必携の外科臨床誌。勿論すべてアート紙使用。

予約購読料 半年 2100 1年 4200

脳 と 発 達

小児神経学・発達医学および関連領域に関するすぐれた総説・原著論文
の他、この領域の展望・速報・紹介記事などを掲載。

毎年 4, 7, 10, 1月発行 編集 日本小児神経学研究会

予約購読料 半年 1000 1年 2000

●緊急症処置のすべて!

緊急に治療をしなければ死にいたる救急損傷とその処置のすべてを集めたもの。urgency 処置の重要性・コッパ・医学的インテレッセを医家に十分認識させ、第1級・第2級の緊急症には、この手で行けという決定的な示唆を与えるきわめて実用的なシリーズである。内外の文献を渉猟し、治療方法を箇条書きにまとめ、シーマを豊富に使って、明快かつ実験的に詳述したのが特長となっている。

医歯薬出版株式会社

東京都文京区本駒込1-7-10

東京電話(03)244-3131(大付)・増巻電話33816

図書目録進呈・乞誌名記

救急ハンドブック

一 損傷編一

1. 総論・胸部損傷

国立王子病院副院長

波澤喜守雄 編

□内容□ 総論 救急医療の概念 災害現場における firstaid と集団事故の救急体制 Resuscitation 急性呼吸不全、外傷における急性肺合併症 輸液法、輸血法、栄養法 熱傷、理学的損傷、化学的損傷、咬刺症 救急における感染問題とその対策 ショック 意識障害 胸部損傷 胸部損傷の展望 胸壁の外傷 気胸、血胸、気血胸、flail chest 気管・気管支損傷 食道損傷 肺損傷 胸部大血管損傷 心臓損傷 横隔膜損傷および胸部外科からみた胸膈合併損傷

B 5判 400p/写真50・図100/¥4,000 1210

2. 腹部損傷

国立王子病院副院長

波澤喜守雄 編

□内容□ 腹部損傷 腹部損傷の展望 腹部損傷 腹部損傷の一般的治療法、術後合併症、予後 横隔膜損傷、脾臓損傷、Thoraco abdominal 合併損傷 腹壁、大網、腸間膜の損傷 腹部食道、胃、十二指腸、空腸の損傷 腹部内臓の重複損傷と合併損傷について 肝、胆管、胆囊損傷 脾臓損傷 腎から尿道までの泌尿器損傷、男女内外性器損傷、胆嚢損傷、abdominal apoplexy 骨盤損傷

B 5判 380p/写真15・図110/¥4,000 1210

3. 神経系外傷

東京大学教授

佐野圭司 編

□内容□ 脳、頭蓋 頭部外傷の死因と病理 頭部外傷急性期の臨床診断法 頭部外傷急性期の補助診断法 頭部外傷急性期からみた予後判定 頭部外傷急性期の治療 脊髄、脊柱 脊髄外傷の死因と病理 脊髄外傷急性期の臨床診断法 脊髄外傷急性期の治療 末梢神経 外傷と回復 急性期の診断 急性期の治療 etc.

B 5判 予備 ¥4,000

心電図プログラム演習

S. G. オウエン 著 二宮隆雄 訳

心電図理論と解説のために作ったもので、初步の理論から高度な解釈方法まで、一定のプログラムに従って、推理のよきこびも味わいながら論理的に学ぶことができる。原著は「British Medical Journal」をはじめ多くの医学雑誌で、心電図を学ぶうえできわめて独創的な方法を述べたものとして推奨されたもので、欧米においても絶賛をあげている。

□内容□ 基本となる考え方 誘導 胸導 誘導 心室肥大 胸ブロック 診断の演習 P波 T波 ST 心筋硬直 心臓ブロック 不整脈

A 5判 200p 図200/¥2,500 1990

心電図の動的観察

一異常像解釈の基本的態度一

本橋 均 著

現在の pattern が過去にどんな姿であったか、将来どのように変遷していくかを見る心電図の「動的観察」は、単純な「静的観察」では不明瞭な時の診断に欠かすべからぬ方法であるがほとんど行われていない。本書は、この時間的追跡を詳細に詳解したのが国初の集積で、数多くの図を随所に用いて理解を助けているが、とくに28の症例については、100に余る追跡図によって細かく観察を試みている。

□内容□ 心電図の動的観察 心電図の判読の問題点 心筋硬直をめぐる諸問題 心筋硬直の一般的経過 些少の変形 高血圧症の心電図の問題点 その他の可逆性ST-T異常 運動負荷反応の問題点 頻拍発作 一過性脚ブロック

B 5判 188p/¥2,900 1990

臨床医の漢方

木下繁太郎 鎌江真五 著

漢方の治療効果に注目した著者が、現代医学の基礎を踏まえながら、まず新薬と同様漢方薬をひとつずつ使っては知ることから始めて、日常診療に組み入れたその体験をもとにしてきわめて実践的な漢方をまとめたもの。陰陽五行などのむずかしい漢方理論から入る解説書と違って、現代医学用語で簡潔に述べた臨床家用の漢方実践書といえるよう。

□内容□ 序論 日常診療のなかで漢方薬をどう使うか 一般治療と漢方併用の問題 漢方製剤の知識一その使い方、使い方 私たちの臨床経験から一症例報告とまとめ一が中心 症候群、大葉性肺炎、胃下垂低血圧で下痢しやすい 日常よく使われる漢方薬 もっとも基本的な漢方薬15種(基本15方) 葛根湯 小柴胡湯 大柴胡湯 その他頻用漢方薬その1(21種) 安中散 人参湯(理中湯) 平胃散 その他頻用漢方薬その2(15種) 茵陳蒿湯 三寶湯 白朮加人参湯 代表的な漢方外用薬(5種) 實理膏 漢方薬使用の実例一主訴を中心に処方を考える一 発熱 頭痛 心悸亢進(症中、停停) 漢方診療法の大要 漢方診断法と一般内科診断との比較 漢方診療のすすめ方の実際 漢方診療に必要な基礎概念一診断から診断へ 漢方薬以外の各種治療法とその応用 外来で簡単にできる刺絡 外来でできる皮膚診療法 熱くない灸一知熱灸、棒灸 漢方、針灸の基礎知識 漢方内臓生理病理学説 経絡学説 気、血、水の概念 病因論 付録 参考文献 漢方関係品目・針灸器具メーカー案内 漢方薬と健康保険 針灸治療と健康保険 漢方薬別一覧 etc.

A 5判 498p/¥3,500 1110

γ-グロブリン

C. A. ジャネウエイ 日か著 高橋 直樹 監訳

検査や診断の新しい方法として注目されているγ-グロブリンについて、その組成や性質、現在確立されているγ-グロブリンによる治療法や、予防の目的のγ-グロブリンの量、種々のウイルスや細菌感染の減菌化など、数多くの実験を踏まえて簡潔に記述したものである。免疫グロブリンの構造と機能、種々の高γ-グロブリン血症、低γ-グロブリン血症状態の解明などの適切な理解と、高度でしかも実用的な知識吸収に好適である。

□内容□ 免疫グロブリンの構造と合成 高γ-グロブリン血症 抗体欠乏症候群 γ-グロブリンの治療への応用

A 5判 160p/¥1,500 1970

病氣と食生活シリーズ

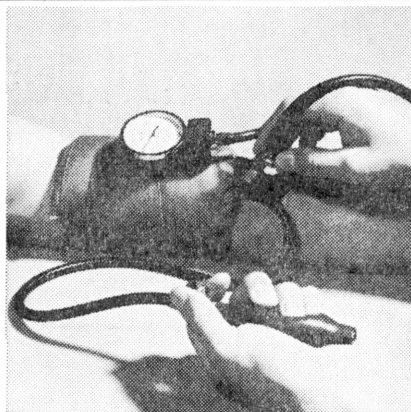
全一巻12巻一 (各B 5判 ¥580 1990)

日本出版権協会認定図書

- 第1回 第2巻 ⑦アレルギーと食生活
- 第2回 第3巻 ⑥妊産婦の食生活
- 第3回 第3巻 ①胃腸病と食生活

【続刊】 ②肝臓病 ③糖尿病 ④高血圧 ⑤心臓病 ⑥肥満症 ⑦幼発期 ⑧老年期 ⑨低血圧

〈健保適用〉



随伴症状の改善が迅速です

★新しいレセルピリン系の血圧安定・降下剤

パラテンシオール[®]

〈塩酸レセルピリン酸ジメチルアミノエチル〉

● 降圧作用は緩和です

過度に降下させることなく、動揺性の高血圧に対し安定化作用を示します

● 抑うつ症状を起こしません

老令者・管理職・インテリ層に特に好適です

● 忍容性は良好です

脳・腎・心・肝・内分泌系障害や糖尿・痛風のある時にも広く用いられます

● 随伴症状の改善が迅速です

頭痛・頭重感・肩こり・息切れ・耳鳴・めまいなど高血圧に随伴する愁訴を速やかに改善します

《用法》

作用が緩和ですので、降圧効果を比較的早く望まれる場合には、他の適当な降圧剤との併用で治療を開始します。一定の降圧効果が得られた後は、徐々に本剤の単独維持療法にきりかえれば、不快な副作用発生の心配なく好適な外来療法が可能です

《包装》糖衣錠(7.5mg):120錠(6錠×20) 600錠(6錠×100) 1500錠(6錠×250)

薬価基準—糖衣錠(7.5mg) 1錠当り25.60円



製造=吉富製薬〈大阪市東区平野町3-35〉
販売=武田薬品 提携=Latéma社〈フランス〉

NIHON ISHIGAKU ZASSHI

Journal of the
Japanese Society of Medical History

Vol. 15. No.3

Oct. 1969

CONTENTS

Special Lectures

Seishu Hanaoka and His Pupil, Isei

Sugitachi.....Hiroshi Kambara...(1)

A Note on Ogai's "Tyusai Shibue" (II)Akira Matsuki...(9)

On Samuel David GrossJo Ono...(12)

Shinnin Kawaguchi, an Anatomist in the 18th Century,

Especially on the Problem of his Being a Hiding Christian

.....Junji Kawashima...(25)

A Portrait in Question.....Is it Yamagata Daini or Kagawa

Shutoku?the late Rinpei Wakao...(30)

Abraham Lincoln's Family Doctors.....E. F. Pearson...(i)

Notes from monthly meetings(38)

Miscellaneous(40)

The Japanese Society of Medical History
c/o Department of Medical History
Juntendo University, School of Medicine
Hongo 2~1, Bunkyo-ku, Tokyo